

強キャラ沢渡さん

ハツタリピエロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世の記憶を思い出した沢渡さんの奮闘記

作者は遊戯王よりデュエマの方が詳しい人間なので変なところがあれば指摘お願いします

目次

俺が沢渡？違うな、俺様はグレイトフル沢渡さんだ！	1
魔界劇場開幕！	4
アカデミアの陰謀	17
月光の姫	26
チャンピオンの実力VS覚醒するペンデュラム	38
エンタメリスト対決	48
不審者との邂逅	61
VS不審者1	66
VS不審者2	79

俺が沢渡？違うな、俺様はグレイトフル沢渡さんだ！

さて……皆さんは遊戯王というカードゲームを知っているだろうか？融合……シンクロ……エクシーズ……儀式……ペンデュラム……リンク……といった数々の召喚法がある知らない者はいないであろう長く続くオフシャルカードゲーム

このカードゲームはアニメ化されていてその主人公が変わるとともに新たな召喚法が生み出されていった。

さて……遊戯王を知っている皆さんは『沢渡シンゴ』というキャラをご存じだろうか？遊戯王シリーズのARCVに出てきたキャラの一人である

出てきた当初はキザで我儘で人のカードをレア故に奪おうとするようなクズっぷりだが、主人公の榊遊矢に感化されていき、エンタメデュエリストとして、視聴者の中からファンが出来るぐらいの成長っぷりを見せる。視聴者からはこんな言葉もある

『遊戯王ARCVの唯一のエンタメ』

『遊矢よりもエンタメしている』

『主人公より主人公してる』

などとアニメでの勝率は低かったが、自身の魔界劇団デッキを活かしたエンタメっぷりを見せていた。むしろもつと勝率を増やしてもいいと思うという声が作者からはある。

つと……話がズレたな。さて……なんでこんな話をしてるかって？

それはだな……

「沢渡さん!!マジ最高っスよ!!」

俺を尊敬の眼で見る取り巻きたち。

俺が沢渡シンゴに憑依転生しちやったからなんだよな……

……

最初に転生した時は目を疑った。いや……転生というよりは前世の記憶を物心がついた時に思い出したというべきかな？

俺はすぐにデュエルケースを開けてみたら何故だか俺のデッキケースにこの時無いはずの、魔界劇団カードがあった。

『魔界劇団』

アニメではいろんなカードを使いまわす沢渡さんが最終的に行きついたエンタメデッキの軸となるカードのカテゴリだ。

魔界劇団といえば沢渡さんと言われるぐらいのカードだ。

沢渡さんは『妖仙獣だ!』っていう声もあるが……俺は魔界劇団派だった。まあ、これは中々いいものが手に入った。妖仙獣も実力を見ればそのうち赤馬零児からもらえるだろう。

その後もデッキをあさってみたが、色々なカードが……って!これって前世で俺が使ってたカードだよな!?

おお……中々いいデッキが出来そうだな……ん?なんだこのカードは?

こんなの俺持ってたか?OCGでも見なかったけど……この次元だけのカードか?にしてはあのカードと同じカテゴリを持つてるけど……

その後も漁ってみたがOCGされていないカードもいっぱいあった

まあいい。このカードたちは俺のデッキにピッタリだからな!

と冒頭はここまで。原作3年前です。

つまり榊遊勝がエクシーズ次元に跳ぶ年、この時点ではエクシーズ次元はまだ侵略されていないと見る。

俺は街中を歩いて、目的の人物を探す。

つと!いたいた!

トマトのような髪型をして、振り子……ペンデュラムを胸にぶら下げている俺と同じ年の少年、ARCVにおける主人公、榊遊矢だ。

ここで原作介入するのはちよつと危険だが原作がBADエンドだったんだし多少変わってもいいか!

「おいおいおい!なぜ泣いているのかな!」

「ん……?」

「俺はカードに愛された天才、沢渡シンゴ様だ。お前は?」

「榊遊矢……」

「オウーケイ！遊矢！おまえはなぜ泣いてるんだ!？」

「グスツ……皆が……父さんをバカにして……」

そこから聞かされたのは父が現れなかったことで、卑怯者の息子というレッテルを張られたこと

聞いただけでも胸くそ悪い。いなくなった本人だけならまだわか
らなくはない。だがまだ10代の子供にそんな重圧を乗せるなど人
のしていることではない。

「おまえも父さんをバカにするの……?」

遊矢がこつちを見てくる。

「一つだけ言っておこう遊矢。いくらおまえが強がったりしようがお
前の父があの時いないという事実は覆せない。でも俺はバカにした
りしないぜ?」

「え……?」

「あの時、あの人が逃げようが何処にいたかなんて関係ない!!榊遊勝
のデュエルがこれまで観客を沸き立たせたのは事実さ!!あの人がこ
れまでに成し遂げたものが、俺たちに夢を与えてくれたのは忘れちゃ
いけない!だから泣くな!!そして見つけろ!!あの人とは違うんだと
!!自分のエンタメを!!」

「沢渡……」

「名前でもいいぜ遊矢!だからほら!泣くのを止めて、これからどうす
るかを考えろ!父のエンタメをするにせよ、自分のデュエルを見つけ
るにせよな!」

「うん!!わかったよシンゴ!!俺やるよ!!自分のエンタメデュエルを
!!」

「オウーケイ!!なら俺はここらでお暇させてもらうぜ!!」

これで少なくとも原作よりは遊矢は心の傷は癒えただろう……
こうして今日もグレイトフルな俺様の物語は続いていくのサツ!

魔界劇場開幕！

「氷帝メビウスでダイレクトアタック！アイスランス！」

氷を統べる帝王がその槍を敵目掛けて突き出すと、爆発が起こった。

「すげえ……」

「沢渡さん！マジ凄すぎっスよ!!」

「さっすが……!!」

俺を褒め称える取り巻きたちの大伴、山部、柿本。グレイトフルな俺様を素直に褒めてくれる素晴らしき三人さ！

おっと……なぜ魔界劇団を使わないんだって……？今は原作の1年前。つまり榊遊矢がまだペンデュラムを生み出していない時期だ。ここで俺が使って万が一榊遊矢がペンデュラムを生み出すというのに支障が出たら原作崩壊どころじゃねえだろ！ってことで、最近は帝を含めたサブデツキを使っている。まあそれでも俺様の勝率は99%だな!!

ちなみにLDSには入っていない。俺様は既に全ての召喚法をマスターしているからな！LDSに入る意味なんてねえんだよ！

柿本たち三人は不良に絡まれていたところをこの俺様が助けて以来、相談に乗ったりした結果、俺を慕って今に至るとなったのさ！

「いやー！沢渡さんにはマジ勝てないっスよ！」

「ホンっと!!1キルとか俺たちにはデキないっスよ！」

「さっすが沢渡さん!!憧れちゃうー!!」

まあ、俺が前世の記憶を思い出したせいかな原作と違って、心の底から慕ってくれているから気持ちがいいものだけ！

「よしよーし！最高に乗ってきた俺様は気分がいいからな！喜べ！今日のスィーツ代は全て俺の奢りだあー！」

「「ホントっすか沢渡さん!!」」

俺たちがノリノリで絶好調になっていると

「な……!!?」

「沢渡さん!!デュエルディスクが光って……!!」

いや違え……！正確にはデュエルディスクのサブデツキケースに入れていたあのカードが光っているんだ……！！

俺たちは光に飲まれて、その場から姿を消した。

……

目を開けるとそこは小さな薄暗い部屋の中だった。

「ここは……どこだあ？おい、柿本、山部、大判無事か？」

「俺たちは大丈夫ですが……」

「何処っすかね？ここ」

「部屋みたいなどころだけど……」

そうだな……さしずつめ監禁場所といったところか「誰!!」!?

突然部屋の中に女の子が発したと思われる声が響いて俺たちは薄暗い部屋の中でその主を探す。と柿本がスマホで部屋を照らすとその人物が姿を現した。

「柊柚子……!?!」

そこにいたのはまさしく柊柚子と同じ顔の少女だった。柚子とはまだ会っていないのだが遊矢が写真を見せてくれたことがあつたし、なにより前世の記憶と同じ顔だった。

「柊柚子！おまえなんでこんなわけわかんねえとこにいるんだ!?!」

「柊柚子って……違うわ。私はリンよ」

「リン……!?!ツハ!!」

思い出したー!!この子、赤馬零王の娘レイのシンクロ次元での生まれ変わりだ!!柚子シリーズの一人!!

ってことはここはシンクロ次元か!?!いや待てよ……!!

「なあ、リン。ここって何処なんだ？」

「ここが何処か知らない……?貴方アカデミアの人間じゃないの?」

「ああ、気づいたらここに飛ばされてきた。それにアカデミアってなんだ?」

俺がそう答えると、大判たちもウンウンと頷く。

「そう……（ユーゴのクリアウイングみたいなものかしら……?どちらにせよ、突然現れたところを見ると本当らしいわね）ここは融合次元のアカデミア……私がいた世界とは別の世界……らしいの」

俺はこの時、シンクロ次元の少女、リンと運命の出会いを果たした。

「え〜つと……!?要するにここは俺たちのいた世界とは別の世界のデュエルアカデミアってところここではデュエルで他の世界に戦争を仕掛けてるってこと?よくわかんねえな……」

大判が腕を組んで頭を回転させている。

「つまりだ。この子もまた、俺たちやこことは違う世界の人間で、この世界の組織、アカデミアに世界を超えて誘拐されたってことだ。合っているよな?」

「え、ええ……そうよ。私はあの日、ユーゴと別れてから、ユーゴにそっくりな奴に誘拐されて……」

なるほど。大体原作通りってところか。この様子だとまだ洗脳はされていないようだな。

「しっかし、酷いやつらっすね!!アカデミアは!!こんな女の子を誘拐するなんて!!」

「でも大丈夫っすよ!!沢渡さんが助けてくれるっすから!!」

え……?

「え……?」

おいおいおい……なに勝手に話進めてんだあ?リンも、え?つてなってるし

「そうっすよ!!沢渡さんのデュエルタクティクスに比べたらアカデミアの奴らなんてチョチョイのチョイっすよ!!」

「ここに来たのもなにかの縁!!沢渡さん!!助けましょう!!」

えー……いやね?こんな少女を幽閉するなんて許せないよ?でも君たち勝手に話を進めないでくれる?

「で、でも……どうやって此処から出るの!?それになんで私を助けるの……?私を助けたらアカデミアに狙われるのに……」

「……お前は助かりたくないのか?」

「そんなわけないじゃない!!私だって……!!自由になりたい……!!ユーゴの夢を叶える手伝いをしたい……!!なのに……!!」

リンが必死に泣き叫ぶのを見た俺は

「え……う？」

彼女の頭にポンツと手を置いて

「だったら俺たちを頼れ。隣で泣いてる誰かを見捨てるほど俺は落ちぶれちゃいねえよ。それともそんなに俺が頼りないか？」

「それは……ちよつとだけある」

「ツ!!おい!!」

このグレイトフルな沢渡さんがそんなに頼りないか!!?

俺が顔を赤くしてカツカするのを見たリンは

「フフツ……フフフツ!!」

涙が止まって笑い出した。

それに釣られて俺も、山部も、柿本も、大判も笑いが止まらなくなつた

「フフフツ……ごめんなさいね。でもお陰でスッキリした。ありがとう。貴方のお陰で助かったわ」

「……まだ助けちゃいないんだが……自己紹介が遅れたな。俺は沢渡シンゴ」

「フフツ!そりやそうね! (違うわ。間違いなく私は救われた。孤独に押しつぶされそうだった私に手を差し伸べてくれた。それだけでも……)」

「沢渡さん!でもどうやって脱出しますか?」

「ここに来た方法でまた世界を移動するってのは!」

「いや……さつきから試したんだがウンともスンとも反応しねえ。まあいい。方法はまだある」

俺たちのディスクはLDS特注品でアクションフィールドを展開してリアルソリッドビジョンを生み出すことができる。

俺はそれを皆に説明すると

「それしかなさそうね……でもここは絶海の孤島。逃げ場は……」

「最悪船を奪うって計画も必要かもな」

「んじゃさつさとするか!グズグズしてると監視が来ちまう!行くぞ

!俺はフィールド魔法クロスオーバーを発動!」

『フィールド魔法、クロスオーバー!』

異変に気づくかもしれねえ。さっさと逃げちまおう！

「俺は手札から魔界劇団ワイルドホープを召喚し、更に魔王の降臨を発動！これで扉を破壊だー!!」

現れた魔王は扉だけを破壊するつもりが大きすぎて壁ごと、いや天井ごと破壊してしまった。

「沢渡さん!!やり過ぎっすよ!!」

「……………」

リンがジト目で見てくる。止めて！

と、とにかくこれで扉は破壊された。さて逃げるか!!

「こつちだ!!急げ!!」

アチャー…………もう来ちゃったか。

「ツ！チツ！俺は魔界大道具ニゲ馬車を発動！」

「沢渡さん!?!」

俺が魔法カードを発動すると黒い馬車がリンたちを乗せた。

「俺が時間を稼ぐ。お前らはリンを連れて逃げろ！」

「ですが！」

「早く行け！」

「ツ！すみません!!」

柿本たちも俺には及ばないが相当強い。俺のカードプールと前世での戦略を教えた結果、柿本は融合、山部はシンクロ、大判はエクシズを使えるまでになった。

アイツらならオベリスクフォーエクス程度ならなんとかなるだろう。

前から来たのはアカデミア兵数名と

「バレットか…………」

別名勲章おじさん。だがアニメオリジナルのそれらのロックカードは厄介極まりない

「貴様ここにリンという少女がいた筈だ。何処へやった」

「あの子なら逃した。もっともここを通す義理もないが」

「デュエルしろ……………ということか。いいだろう。お前たちはプロフェッサーに報告を告げろ。コイツは……………この男はお前たちが敵う相手ではない」

アカデミア兵が退散するとバレットがディスクを構えると俺もディスクを構える。

「デュエル!!」

「先行は私だ！私はキャリアセンチネルを召喚！更にキャリアセンチネルの効果でデッキから漆黒の豹戦士パンサーウオリアーを手札に加えて融合を発動！獰猛なる黒豹よ、歴戦の番兵と交じり合いて、新たな雄叫びを上げよ！融合召喚！来い！パンサープレデター！パンサープレデターの効果！自身の半分の攻撃力の数値分のダメージを与える！パンサープレデターの攻撃力は1600！よつて800のダメージだ！」

「グウツ……」

沢渡3200

「カードを三枚伏せてターンエンドだ」

いきなりガン伏せか……面倒なやつは……紅鎖の獣闘機勲章かな……

「じゃあ行くぜ！俺様のターン、ドロー！」

引いたカードは……魔界台本舞台準備か！ステージディレクト

「俺は手札からフィールド魔法、魔界劇場ファンタステイックシアターを発動！その効果で手札のビッグスターと、舞台準備を見せてデッキから魔界台本オープニングセレモニーを手札に加えるぜ。更に今見せた魔界劇団舞台準備を発動！ビッグスターをエクストラデッキに送って2ドロー！ただし、この効果でエクストラデッキに送ったビッグスターはこのターンP召喚では呼び出せない」

「メインデッキのカードをエクストラデッキに直接送るだど……!?!」

「おおっとお!?こんなところで驚いてもらっちゃ困るぜ？更に墓地の魔界台本舞台準備の効果発動！コイツを除外して、デッキから魔界台本と名のつく魔法カードを3枚まで選択して相手に選ばせた1枚を手札に加える。俺が選ぶのは3枚の魔界台本即興演劇だ！スペシャルアドリブ」

「……右のカードだ」

「そして！今手札に加えた魔法カード、魔界台本即興演劇を発動！ダイクアクターフュージョンデッキの魔界台本魔界俳優融合を墓地に送って、デッキから2枚目

のビッグスターを手札に加える。そしてスケール3の魔界劇団エキストラと！スケール8のファンキーコメディアンで！ペンデュラムスケールをセツティング！」

青い柱の中に魔界劇団がそびえ立つ。

「なんだ……これは……!?!」

「これでレベル4から7のモンスターが同時に召喚可能！P召喚！現れよ！俺のオールキャストたち！手札からビッグスター！サツシールキー！そしてえ！ワイルドホープだ！」

魔界劇団ビッグスター

レベル7／ATK2500

魔界劇団サツシールキー

レベル4／ATK1700

魔界劇団ワイルドホープ

レベル4／ATK1600

「一気に3体のモンスターをだど……!?!」

「更に！墓地の魔界台本魔界俳優融合の効果！魔界劇団PモンスターがP召喚された時！このカードを手札に戻す！そして更にエキストラのP効果！このカードをPゾーンから特殊召喚する！更に更に！墓地の魔界台本即興演劇の効果！エクストラデッキの表側表示の魔劇団Pモンスターを特殊召喚する！来いビッグスター！」

魔界劇団ビッグスター

レベル7／ATK2500

「かかったな！この瞬間！紅鎖の獣闘機勲章を発動……なぜだ!?!何故発動できない!?!このカードはエクストラデッキからモンスターが特殊召喚された時に発動できる筈だが……!」

「ビッグスターの効果！ビッグスターの召喚、特殊召喚時に相手は魔法、罠カードを発動できない！」

「そんな効果が……!?!」

「さあー!!役者は揃った！俺はビッグスターの効果でデッキから魔界台本魔王の降臨をセットする！更にもう一体の効果でオープンングセレモニーをセット！これで……「バレット！」「セレナ様!?!」ん……

!？」

俺が魔法カードを発動しようとした時、聞いたことのある名前が聞こえてきた。

「バレット！私を置いてなにをやっているんだ！デュエルなら私もやりたいというのに！」

「セレナ様！これはいつものデュエルではありません！正真正銘の闘いなのです！」

「ならば尚更私にやらせろ！お前が敵か……さあ！かかってくるがいー！」

威勢よく言い放つセレナだったが

「……だったらデュエルデイスクぐらい用意してろよ」

「!?ハッ!!しまったあー!!脱走に邪魔だからと持つてくるのを忘れてしまったああ!!」

マヌケなの……?この子

この子は融合次元でのレイの生まれ変わりのセレナ。月光カードという厄介極まりないデッキを使うのだが……少々天然なところがある女の子だ。

「セレナ様！この戦いに貴方を参加させるわけにはいきません！これはデュエル！遊びではないのです！」

「イヤ！私もアカデミア兵として！デュエリストとして！逃げるわけにはいかないんだ！デュエルとは戦いだからな！」

「そうかなあ？」

俺が思ったことを口に出すと、セレナとバレットは言い合いを止めて、こちらを向いた。

「貴様……どういう意味だ」

「言った通りだよ。デュエルってのは、確かに己のプライドを懸けて競い合うものだけ？だけど、そんな相手を傷つけるようなデュエルってのは楽しいものなのかあ？」

「楽しい？デュエルってのは楽しいものなのか？私は戦うためだけだとしか知らなかった……」

「セレナ様！コイツの言葉に耳を傾けてはなりません！」

「なら魅せてやるよ！俺様のエンタメデュエルってやつをな！俺はセットしていた魔界台本オーブニングセレモニーを発動！フィールドの魔界劇団の数だけ俺のライフを500ポイント回復する！さあー！！舞台を盛り上げろー！！」

沢渡LP5700

俺が発動した魔界台本を読んだ劇団員たちが鮮やかに彩られた舞台を駆け巡ると、その度に花火が打ち上がって舞台を盛り上げる。

「これが……エンタメデュエル……」

「まだまだ行くぜー！！次はスペシャル花火だあー！！」

俺が指をパチンと鳴らすと一つの紅い花火がワイルドホープの銃によつて空高く打ち上げられた。

それが空で花が開くように解放されて、花びらがチラチラと散るような景色を生んだ。

「綺麗だなーおいーもっとやってくれ！」

「ご満悦していただいて光栄です。ならラストを占めるのはこれだあー！！」

俺の合図でビッグスターを除く、3人の魔界劇団員たちは手を繋いで円となり回り始めて、ビッグスターがその円に飛び込むと足を使ってビッグスターを空中に蹴り上げる。そして空中で2人のビッグスター左手と左手を繋ぎ回転すると光の竜巻が舞台を輝かせる。

そして舞台に降り立ったビッグスターはお辞儀をしてファイナルを占める。

「すごい……！！凄いなお前！！これがエンタメデュエルというやつか！！
見ている私も楽しくなってきたぞ！！デュエルとはこんなに楽しいものなのか！！」

その様子を見ていたバレットは

（セレナ様……楽しそうだな……だが何故だろう……あんなセレナ様
を見ていると……私も嬉しい……そうか。私はいつの間にかプロ
フェッサーよりもセレナ様を……）

「楽しんでいただけただけのなら結構……だが俺のエンタメは終わっちゃ
いないぜ！俺は手札の魔法カード、魔界台本魔界俳優融合を発動！こ

れにより、俺のフィールドの魔界劇団を素材に融合召喚する！」

「なに!? 貴様、融合も使うのか!?!」

「俺は即興演劇で召喚したビッグスターとエキストラで融合! 舞台を飾る演劇者たちよ! 暗黒の渦で一つとなりて、新たな舞台に君臨せよ! 融合召喚! カモン! 魔界劇団マキシマムアクションスター!」

『ヒャーハッハッハッハッ!!』

魔界劇団マキシマムアクションスター

レベル8 / ATK 3000

「失敗したな! この瞬間、私は紅鎖の獣闘機勲章を発動……できない!?! まさかソイツも?!」

「そうだ! マキシマムアクションスターも融合召喚時に相手は魔法、罫カードを発動できなくなる効果を持っている! そして! ビッグスターをリリースして効果発動! このターン! お前は魔法罫カードを発動できない!」

「ならばその効果にチェーンして融合解除を発動! 更に針虫の巣窟を発動! デツキから5枚を墓地に送る! パンサーウォリアーとキャリアセンチネルに融合を解除させる!」

ツチ! 融合解除か……名誉の獣闘機勲章かと思っただがな……それに針虫の巣窟……面倒なカードが落ちてなきやいいけど……

「更にビッグスターの攻撃力の半分の数値分! 攻撃力をアップする! ダメ押しだ! 俺はセットしていた、魔界台本、魔王の降臨を発動! 俺の場の魔界劇団の数だけ、つまり三枚! お前の表側表示のカードを破壊する! 俺が破壊するのはパンサーウォリアーとキャリアセンチネル! そして俺の場にレベル7以上の魔界劇団が存在する時、魔王の降臨の発動に対して、相手はカードを発動できない! さあ! パンサーウォリアー! キャリアセンチネル! 御退場願おうか!」

「グッ……!!」

魔界劇団マキシマムアクションスター

レベル8 / ATK 4250

「俺はカードを1枚伏せる。行け!! バトルだ! 俺はマキシマムアクションスターでダイレクトアタック!!」

「この瞬間！墓地のタスケナイトの効果！手札が0で攻撃を受ける時、デュエル中に一度だけ！このカードを特殊召喚して、バトルフェイズを終了させる！」

「無駄だ！自分の場にP召喚したPモンスターが存在する時、魔界劇場ファンタスティックシアターの効果で相手が発動したモンスター効果は全て『相手のセットした魔法、罫カードを破壊する』に書き換わる！」

「なんだとお!!？」

「よってタスケナイトの効果は不発して、俺のセットしたカードを破壊する！破壊されたのはオープンングセレモニー、よって手札が5枚になるようにドローだ！さあー!!終わりを美しく飾ってくれ！アクションスター！」

『ヒャーハッハッハッハッ!!』

リリースしたはずのビッグスターがブランコを持って現れ、そのままアクションスターを掴んで空中ブランコの体勢に入るとアクションスターも空中で身を捻って回転ライダーキックをバレットに食らわせた。

「グアアアア……!!」

バレットLPOLLOSE

「バレット！」

「セレナ様……私は無事です……」

「何を言う！怪我をしてるではないか！医療班のところへ連れてってやる……！」

「そんなことをすれば貴方が捕まります……おやめください……」

「バレット……！お前を見捨てられるわけないだろう……！」

うーん……実際に感動的なんだけどやった張本人からすれば罪悪感が半端ないってことで……それに！

「リンを探さねえと！でも見捨てたら後味悪いし！」

とその時、

「「うわああああああ!!」」

「柿本！山部！大判！どうした!!」

「さ、沢渡さん……」

「アイツヤベエ……！」

「逃げきれねえ……！」

「リン大丈夫か!？」

「え、ええ……」

俺が近寄っていたが恐怖のあまりか震えていた。一体……いや、あいつ以外いないな……

俺が見据えた先にいたのは紫色のキャベツを連想させる髪型で櫛遊矢にそっくりな顔立ちの少年、リンを攫った張本人、ユーリだ

「中々やるようだったねえ。でもそろそろ終わりにしようかな?それとも君も僕に挑む?」

温厚そうな顔をしていたがその瞳からは全てを飲み込む残虐性が感じられた。

どうする……!!?こいつらを見捨てるってのはナシだが、勝てるのか……!?!こいつに……!

「クツ……!仕方ない、やる!一つ質問させるユーリ」「おや?セレナ?また脱走してきたの?で?質問ってなあに?」遮るな!」

グダグダだなあ……

「今、バレットから聞いたがアカデミアが軍人やデュエリスト以外にも無差別で襲っているというのは本当か?」

「なあに?突然」

「いいから答えろ!」

「ムキになっちゃって。いいよ。君にも真実を教えてあげる。そうだよ。僕らアカデミアの人間にとってエクシーズ次元の奴らは得物にすぎないんだから。あいつらの悲鳴が!怒号が!それを全て食らいつくせると思ったたらゾクゾクするんだよなあ……!」

無邪気な子供ののように笑うユーリだったがその眼は捕食者の眼だった。

「そんな……私が信じてきたアカデミアは……やはり間違っていたのか……」

ガクツと手を地面について絶望するセレナ

「さあてと、どうする？君は中々、歯ごたえがありそうだからなあ…… たっぷりと僕を楽しませてから絶望してよ」

どうする……勝てるのか……!?いや！ここはやるしか……！と思った時、俺のデッキのあのカードが光り出した。

『なっ!!?』

それと同時にセレナとリンがつけていたブレスレットも光始めた。俺たちはその合わさった光に包まれてこの場から姿を消した。

……

光が収まった場所は公園のようなところだった。

「ここは……」

「あっ！LDSのビル！ってことはー！」

「俺たちの次元に戻ったんだあー！」

周りを見てみて、メンバーを確認する。山部、柿本、大判、リン、セレナ、バレット。ユーリは……よかった。いないみたいだな。

「ってことはシンゴ、ここは貴方たちの次元？」

「ああ、そうだな。ひとまずアカデミアから脱出するって目的は達成したみたいだな」

と安堵をついていると

「バレット！しっかりしろ！」

「セレナ！とりあえず俺の家の医療室に運ぶぞ！」

こうして俺たちはわずか30分の次元旅行を終えたのだった。だがこれは序章に過ぎなかった。

アカデミアの陰謀

その後、バレットをセレナと2人で家に運んで俺様専属の医師に診させた結果、特に問題なしだった。

んで、家のリビングで休ませているのだが

「お前……スマン。リンは本当に私そっくりだな」

「アハハ……私もあの時、セレナを見た時は驚いちゃったけどね」

同じ顔の少女が笑い合っているのは鏡写しのような光景であった。

「ホントにそっくりすよね」

「ああ、双子と言われても信じるよな」

「確か沢渡さんの友達の榊遊矢の幼馴染……柊柚子だっけ？あの子もリンやセレナと同じ顔じゃなかったでしたっけ？」

大判が俺に聞いてくると

「ああ、確か写真を遊矢に見せてもらったことがあるが、髪の色や目の多少の違い以外は見事に同じ顔だった」

俺のたちの話が聞こえていたのか

「そういうえば、シンゴって初めて私を見た時、柚子って間違えたような……」

「なに!?私と同じ顔の人間がもう1人いるのか!?教えてくれ!」

セレナが詰め寄ってきたので、

「おおぅ……えーとえーと、どれだったっけな……あつた!これだ」

俺がスマホに送られた写真を見せると

「本当に私や、セレナにそっくり……!」

「世の中には同じ顔の人間が3人はいるという話は本当だったのか……!」

いや、実は4人いますって知ったらどんな反応するだろうな

「しっかし、エクシース次元か……」

「柿本?」

「いや、あのユーリってやつが言ってたんすよ。『君たちは何処から来たの?』って負け犬のエクシース次元が仲間を取り返しに来たってところ?』って。エクシース次元なんて世界があるんだし、アカデミアが

融合を使ってるのをみたところ、多分ですけど融合次元ってところでしょ？だったらリンはエクシーズ次元の人間って考えたんすよ。でも彼女がエクシーズ召喚を知らないっていつてたし、融合とエクシーズがあるなら、シンクロ次元ってのもあってもおかしくない……」
こいつ前々から思ってたが感が鋭いな

「確かにセレナにも聞いてみて、融合を使う人がエクシーズ次元を侵略してたって言ってたけど、そんなこと私の世界では起きてないし、なにより、ハートランドなんて場所、私の世界にはないわ」

「こりゃ、リンはシンクロ次元の人間で決まりみたいすね……うん？待てよ」

「どうしたんだ？山部」

「いやね。俺は柿本とユーリってやつの会話を俺はその時、他のアカデミア兵を相手にしていたから聞いてなかったんすけど、今の話だとユーリはエクシーズ次元の人間が仲間を取り戻しに来たと勘違いしてたんすよね？だったらエクシーズ次元にも攫われた人がいるんじゃない……」

山部の言葉にリンも

「確かに……でもなんのために私やエクシーズ次元の人を攫ったんでしょ……こう言うのもなんだけどエクシーズ次元の人はともかく私はただのコモンズの一人だし……」

「コモンズ？」

大判が聞きなれない言葉に首をひねっているとリンが自分たちの世界の状況を教えてくれた。俺も一応聞いていたが原作とあまり相違はないようだな。

「なるほど……」

「厳しい世界らしいっすね」

「でも確かにそれならなぜアカデミアはリンを攫ったんでしょ……？」

まあ、確かに理由に行きつく人なんてこの時点ではないわな

「アカデミアは……間違っていたのか……ならばそれを信じていた私は……」

「セレナ……」

「私も同罪だ……プライドを失っていたアカデミアを誇り高いものだ
と信じてデュエルを穢していた……！私は……！」

と自虐しているの彼女に俺はシェフが用意してくれたクッキーと
マカロンを持っていく。

「はい」

「え……？」

「食えよ。とりあえずそれでも食って、落ち着け」

セレナはポカーンとしていたが

「確かに知らないことも罪かもしれないがな？知ったのならば、信じ
ていた自分の罪を償う意味でも前を向いて誰かのために今、出来るこ
とをやればいいんだ。おまえはまだ立ち直れるさ。ほらだからさ！
これでも食って、元気になれ！」

「沢渡……」

「さ！食え、食え！美味しいぞ！」

俺がマカロンが乗った皿をセレナの前に押し付けるとセレナはそ
れを口に運ぶ

「ん……美味しいな」

「そうだろう！」

俺がドヤ顔で言うと

「ウザい……」

「んだとお!!？」

「……フツッ！ハツハツハ！」

「あ！おい！笑うな！っていうかお前らも！リンも！」

すっかり笑いの空気に支配された俺は複雑な心境になる

俺って威厳がないのかね……

そう自虐していると

「おい」

「ん？」

「ありがとう」

セレナが花も綻ぶような笑顔でお礼を言ってくれたのに思わず赤

面してしまった。

柿本たちがニヤニヤした目でこちらを見てきたので締めてやったが

とバカやっていると

「坊つちやま、バレットさんが目を覚まされました」

俺の家の執事のセバスチャンが入ってきて連絡を告げてくれた

その報告を聞いたセレナはすぐに部屋から飛び出した。

「サンキュー、爺や」

爺やに一言礼を言つて俺たちも後を追う。

部屋に入ると意外にもバレットは大人しくしていた。デュエルの時にバレットが持っていたアカデミア製のデュエルディスクは壊れていたのだがこいつは軍人だからな。念には念を得ていたのだが

「バレット！無事か！」

「セレナ様……ええ……なんとか」

「あー……大丈夫だったか？」

「少年……君のおかげで私は助かった。この恩は敵など関係なくいつか返そう」

「いや、その怪我俺のせいだしいいよ……まあともかく無事ならよかった。礼と言つちやなんだが……アカデミアのことについて知らないか？」

「……助けられた身で言うのもなんだが、私は元傭兵の身でアカデミアに雇われただけだ。幹部ほどの情報は持っていないぞ」

「沢渡、バレットは確かに戦場で傷を負ってから、私の警護に回されたから、本当だと思う」

「構わない。リンを助けた以上、いつアカデミアがスタンダードに来るかもわからないからな。知っておきたい。そもそもリンを狙う理由つてなんなんだ？」

「確かに謎つすよね」

柿本たちも頭を捻っていた。それを見たバレットは

「……その理由ならある程度予想がつく」

「……教えてくれ」

「……まず、理由を述べるにはアカデミアで囚われているもう1人について話さなければならぬ」

「ん？それってエクシーズ次元から攫ってきた人物のことっすか？」

「そうだ。一度監視を任された時に、会ったことがあるのだが、あの時、私はプロフェッサーの目的の1つがわかったような気がしたのだ」

「なんでですか？」

「これを見せてくれ」

バレットが懐から取り出したスマホの写真データを見せると俺を除く皆が絶句した

『終柚子（私）……!!?』

そこには紫色の髪のリンやセレナより柚子にそっくりな目をした同じ顔の少女が写っていた

「いや、待てよ……まさか！」

「そうだ。彼女はエクシーズ次元からプロフェッサーの命で捕らえてきたアークエリアプロジェクトの要……である黒咲瑠璃だ」

柿本たちやリンはしばらくその場で硬直していた

……5分後

「まさか、私にそっくりな顔の人が3人もいるなんて……」

「いやー……驚いたっすね」

「しかし……こうなるとプロフェッサーってやつ目的って……」

「ああ、お前の思う通り、セレナ様と同じ顔の少女がプロフェッサーの計画の要らしい。そしてセレナ様、ご気をつけください。プロフェッサーの狙いの1人に貴方も含まれております」

「ああ……なんとだくだがこうして実行していることを見ると本当だと感じる」

「待てよ……これまでにリンやその黒咲さんを攫っているってことは……まさか！」

「ああ、セレナ様と同じ顔の終柚子を捕らえにアカデミアの兵が来るのもそう遠くはない」

全てを察した柿本たち。リンもまた攫われるかもしれないという

恐怖に震えていた。

「……ありがとう。アンタのおかげでアカデミアの狙いが大体分かった」

「私は礼を返したただけだ」

「……それで本題だが、これからどうする？アカデミアに戻るのか、それとも……」

「……私はアカデミアの命でセレナ様の護衛をしていたが……アカデミアの狙いがセレナ様で……セレナ様がアカデミアと決別するなら……私もアカデミアに反旗を翻そう」

「バレット……」

「……信じていいんだよな？」

「私の誇りにかけて嘘はつかない」

「わかった。それでリンやセレナもそうだが……これからどうする？」

「なにをだ？」

「あつ……」

リンは俺の言った意味を察したがセレナは未だに首を傾げている

「あのさ、どこで住むって話。ホテルとかに泊まれる金や宛がある？」

「……そういうことか」

「どうしましょう……」

「セレナはともかく、リンはシンクロ次元に返してやりたいが……このカード……さっきからウンともスンとも反応がねえ」

俺がこの世界で見つけたカード、このカード、クリアウイングみたいに次元越えられる力があるとは思っただけ、上手いところ発動するわけじゃなさそうだ

俺がどうするかと思案中に

「あつ、沢渡さん！俺もうそろそろ門限なんで、先に失礼します！」

「あつ、俺も！」

「今日はお疲れ様でしたー！」

柿本たちはさっさと帰っちゃったし……

しやーない。元はと言えば俺が巻き込んだんだ。

俺は未だに寢床で悩んでる3人にある提案を出した

・・・
その後、セレナとリン、バレットは俺が出した提案に二つ返事です承してくれた。

自分で言うのもなんだが俺の家は結構広い。
ってことで、俺の家に住まないか？って話をしたらあっさりと受け入れてくれた。

知らない男の家に泊まるのも抵抗があるかなーって思ってたらセレナとリンはあんまりそういうのはなかったらしい。

むしろリンは俺が用意した客室の豪華さに目を輝かせていた
バレットもセレナの護衛ということで構わないと了承した。

んで、今は歓迎会ということでお菓子を振る舞っているのだが……
「いや……お前ら食べすぎ」

リンとセレナは目の前のお菓子を夢中で味わっていた

セレナはアカデミアでは見たこともない食べ物に、リンは生まれたから食ったことのない食べ物に興味を惹かれて一口食べたなら、見事にお菓子の虜になってしまったらしい

「いや別にいくらでも食えとは言ったけどさ……太っても知らないぜ？」

「モグモグ……問題ない……モグモグ……その分運動すれば大丈夫だ」

「そうね……モグモグ……私も頑張るわ」

彼女たちは目の前のドーナツとマカロンを食うのに必死になって
いるらしい

「バレット、アンタは食わなくていいのか？」

「問題ない」

この人は軍人なので甘いものは食わない主義らしい
しっかし……思いつき原作から離れちゃったけど……大丈夫かな……もしかしたら原作より早くアカデミア兵が来ることになった
ら……

そんな不安を胸に抱いていたが目の前で笑顔でドーナツを食べて

いる2人を見ると

(できるかどうかじゃない。守らなきゃな)

心の中の余計な不安など消したんだ

.....

多くのモニターによって様々な情報が映し出された部屋では職員が機械を管理していたがその一番上の場所では眼鏡をかけたインテリ風な男が腕を組んでいた。その男に黒服の黒いサングラスをかけた男が話しかける

「社長……」

「どうした。中島」

「3時間ほど前に次元跳躍の反応がありました」

「なに!? 遂にアカデミアが来たのか!？」

「いえ……ですが監視カメラから気になる情報を入手いたしました。こちらを」

モニターに映し出されたのは同じ顔の少女が2人

「セレナ!? それに……同じ顔の……!!? 中島、彼女らと一緒にいる彼らの情報を調べてくれ」

「それなら、既に調べ終わりました」

「流石だな。それならその情報を」

「はい。4人の中の3人は特にこれといったものはありません。しかし、この少年は」

「沢渡グループの御曹司か……面倒だな」

沢渡グループはデュエルモンスターズ関連ならLDSに及ばないが、総合力ならLDSをも凌ぐとされるグループだ。

「沢渡シンゴ……彼の情報は時々耳に入ってくる。なんでも複数のデッキを使いこなすほぼ負けなしの凄腕だとか。負けも少々特殊なデッキを使った時などとか。一度動画で彼のデュエルを見てみたが、彼ほどの腕前なら……だが……」

「はい。彼を連れてくるとなる……沢渡グループも黙ってないかと」

沢渡は一族の中でも跡継ぎとされるほどの存在故に沢渡グループ

の沢渡シンゴを怒らせれば破滅は免れないなどの噂まである。

いくらLDSといえどもなにもしていない彼を連れてくるのは容易ではない

「仕方ない。彼についてはしばらく泳がせておこう」

「いいんですか!?!」

「構わん。それにセレナが沢渡といるのにも見極める必要がありそうだしな……」

こうして我らが沢渡さんの知らないところで思惑が蠢いていた

月光の姫

セレナたちが来て3日、スタンダード次元、舞網市は特に何事もなく、平和だった。

んで、今俺たちはというと

「ほ、本当にいいのか……!? こんな高そうな服……!」

「え、ええ……! 大丈夫なの……!」

「いいって言ってるだろ! それにここは一般のよりもちよつと高いぐらいだぜ? お前ら、服つてのは値段が掛かるつてのを知らないのか?」

舞網市で有名な服のブランドの店に来ている。生活してすぐに気づいた問題は2人とも替えの服がないということだった。家にはメイドさんの服があつたが明らかにサイズが合わないし、俺に姉妹はいないので買いに行くことにしたのだ。柿本たちを荷物持ちついでに誘おうと思つたのだが……

『すいません! 俺、家の手伝いがあつて……!』

柿本の家は飲食店なのでその手伝いと

『俺も家の掃除を手伝って言われちゃつて……』

山部も無理らしく

『俺は……追試があつて……』

大判は追試らしいので仕方なくバレットをセレナの護衛というこゝとで誘おうとしたのだが

『すまない少年よ。家のボディガードの者たちに稽古をつけてくれた頼まれたのでな。世話になつて身故に力になりたくてな……』

バレットも客人扱いだったのだが、その戦闘力の高さを見込まれて時々、ウチのボディガードに稽古をつけてるらしい。

そういうことで俺たち3人で服を買いに来たのだ

高そうには見えるがここのブランドは庶民でもオシャレに見せれるようなファッションが売りなのだ。だからちよつと高いぐらいなので俺のお小遣いで買えない値段ではない

だが2人は服を見るやいなやアワアワしていた。

2人とも環境上で、一般的な服の値段を知らないのかな？

でも折角買いに来たんだから、古着でケチるなんて男としてやっちゃいけないことだと思う

それにここはウチのグループの傘下の店だからな。折角なので2人にオリジナルコーデイネートを頼んだのだが……

「ほ、本当に私は安いので構わんから……!」

「そ、そうよ……!住まわせてもらってる身なのに……!」

当の2人がこの状態だ。2人とも高いものに抵抗があるのだろうか?……いや確かにそうかもな。セレナは箱入りだし、リンはギリギリで生きてきたのだからな……ちよつと考えてなかったか

でも、だからって女の子のプレゼントに古着を送るなんて俺にはできない。

なのに

「ほ、本当に古着でも文句は言わないから……!」

「ふ、服にそんなに金を使わなくいいから……!」

なんか逆にイライラしてきたので

「あー!もう!気にすんなって言ってるだろ!この俺が古着でケチるなんてできるか!それに2人とも可愛いんだからもっとオシヤレを気にしろよ!」

俺が溜まっていたものをぶちまけると

「……………/ / / / /」

あれ……?2人とも顔真っ赤だぞ……?

「し、シンゴ……」

「なんだよ……セレナ」

「わ、私って……可愛いのか……?」

「なんだよ……可愛いに決まってるだろ」

「/ / / / /!!!」

更に顔が赤くなるセレナ

「ね、ねえ……わ、私も可愛い……?」

「リンまで……当たったり前だろ」

「……………/ / / / /!!!」

リンも頬まで真っ赤になる

あれ……？いや、可愛いとは言ったけどさ

なんで2人とも顔が赤くなってるの？可愛いって言われたことなのかな……？二人とも本当に可愛いから言われたことぐらいありそうなものだと……

二人とも顔を押しえて後ろを向いていたが、チラチラつとこちらを見ているのでドキツとしてしまった。だってその無垢な目が本能をくすぐるっていうか……言葉には表現できないほどの感情に駆られてしまう

あああ……!!なんか俺まで顔が赤くなってきたぞ……!!

……

我らが沢渡さんをガラス越しに暖かい目で見守る視線が3つ

「ありやセレナとリンにも気がありそうだなあ……？山部」

「ああ……！沢渡さんも少なからずリンとセレナに対して恋愛感情がありそうな気がするぜ……！柿本、お前が立てたこの計画に乗っかって正解だったぜ！」

「ああ！セレナとリンは動揺して気づいていないが二人にも沢渡さんの言葉にときめいているのがわかる……！でも意外っすね？バレッツトさんも参加するなんて」

「私はセレナ様の護衛もあるが……セレナ様の恋を邪魔したくはない……それにセレナ様の恋人になるかあの少年を見極めるというものもあるかな」

「大判は……こんな面白そうなものがあるのに追試とはなく！」

「全く……残念だぜ。大判くん」

と友の無情なる行事に情けを感じていると

「はあ……悪かったな」

「おつーやつと来たか大判！」

「こつち来いよ！今いいとこなんだぞ！」

中の光景を見た大判は

「うわ……なんか口の中まで甘くなりそう……」

「そんなお前にはい！コーヒーだ！」

「おつ、ありがとう……ズズズ……美味しい」

「しつかし、セレナは黒のロングスカートとゴスロリに白のワンピース、リンはピンクのキャミソールとショートパンツにセクシートップスとジーパンか」

「セレナ様は派手なものやかつこいいものを好まれているからな。直感でそれらしきものを選ばれたのだろう」

「さてさて……どんなものかな……？」

そして試着室のカーテンを開けて二人が現れると

「……!!!」

三人とも顔を真っ赤にして中を凝視していた

……

なんか視線を感じるんだが……もしかしてアカデミアか……？

でもそれならなんで襲ってこないんだろう……？スタンダードは敵ではないと舐めているはずなのにな

とカーテンを開ける音が聞こえらるとともに現実に戻されて

「シンゴ……着替え終わったぞ」

「ああ……まあ、多分似合っていると思う……」

俺が振り向いてそこにいたのは黒で包まれた青髪ポニテの美少女と、ピンクのキャミソールと白のパンツを着ていたショートグリーンの美少女だった。

首元から腰から少し下までの黒のブラウスに少し薄めの黒の花弁が描かれた黒のスカートに袖先から先のブレスレット。黄色のリボンで纏められている青髪を揺らしてはにかみ笑いを浮かべるセレナ

リンの方は肩から先が露出している大胆なキャミソールと爽やかさを感じさせる白のパンツの後ろに腕を回して俯いていたがその顔は耳まで真っ赤だった。

同じ顔のはずなのに対照的な雰囲気二人から感じたが共感して思ったことが一つ

「ど、どうだ……!?!」

「シンゴ……？」

「……………ふひくし」

俺がそう眩くと数秒間は意味がわからなかったのかキョトンとしていたがその直後

「……………／／／！！？」

急に顔を紅潮させてカーテンをバツ！と閉める二人

……………ツハ！俺は何を！？」

記憶を掘り返してみると自分の言ったことを思い出して……………ってウワアああ……………！！

何言っただよ俺は！褒めるにしても綺麗だとか可愛いだとかあるだろ！なんだよふつくしいって！海馬社長かよ！？」

ダメだダメだダメダアアアア……………！！思い出せば思い出すほど、あの時の2人のふつくしい姿……………って！心の中まで羅列が回ってねえじゃねえかアアアア！！

「し、シンゴ……………？」

「だ、大丈夫か……………？」

元の服に戻ったリンとセレナが心配そうな目で見てきたので心を落ち着かせて2人に向き合う

「あ……………なんでもない。大丈夫だ。それよりその服、気に入ったか？よかったなら買うけど」

「／／／……………シンゴがよかったなら……………」

「／／／……………お、お願いします……………」

恥ずかしそうに俯きながら頷いた2人をレジまで連れて行き、会計を済ませた。

……………

沢渡さんを見守る4つの視線の主たちは

「いや……………美しかったな……………」

「沢渡さん両手に花で羨ましいぜ……………」

「しっかし、オシヤレというものはあそこまでイメージを塗り替えるとはな……………」

「確かに……………セレナ様は勇ましいというイメージだったが……………ファツシヨンというものは奥深いものだ……………」

「つと！沢渡さんを追いかけないと！」

柿本たち4人組はその後もこつそりと尾行を続けていると

「返してよー」

「「!?」」

公園の方から子供の泣き声と叫びが聞こえ、声の方を見ると、沢渡とそう歳の変わらない男が小学生ぐらいの子供からボディーガードを使ってレアカードを強奪している様子だった。男は制服から察するにLDS所属に見えた

「なくに言っただよーこのカードはアンテイで勝った僕のもんだろ
！」

「僕は……やりたくない……って言ったのに……！」

「なあにーこのカードは僕が有効活用してやるよ！それとだ……生意気な目で見ているテメエにはお仕置きが必要だな！」

ボディーガードが小学生の子供に襲い掛かろうとしたが

「グワアツー」

「ツ!?誰だア!?」

「……貴様、それでもデュエリストか」

青髪ポニテの少女、セレナがボディーガードを吹き飛ばし、リンが少年を守るように前に立った。

……

つたく……！折角2人とも機嫌が良かったのに……コイツのせいで台無しだ！コイツの名は鬼瓦猛、大企業の御曹司でデュエリストでもあるが、噂ではどんな手を使ってでも欲しいカードを手に入れるという悪どい奴だ………なんか原作の沢渡さんも最初はこんなだったような……いやいや！今の俺はコイツとは違うんだ！

ともかく今回は見たところ、無理矢理トレードデュエルを仕掛けたんだろう。

「なんだア!?テメエら……って沢渡！」

「……シンゴ、知り合いか？」

「まあな、著名人のパーティーなどで何度か会ったことがあるぐらいだよ。つてもさーまさかお前がこんな下衆いことをしてたなんてない！噂通りってわけか。お前の父上に知れたらどうなるんだろうなあ

「？」

「デメエ……!!!」

「ま、その前にお前は俺が叩き潰してやるよ。デュエルだ。勝ったらその子のカードを返してもらう。代わりに俺が負けたら俺の一番お気に入りのカードやるよ」

「……上等だあ!!!ぶっ殺してやる!」

よしやりますか「待ってくれシンゴ」セレナ!?

「どうした?」

「このデュエル……私にやらせてくれ」

「……なんでだ?」

「……私は誇り高いデュエリストを夢にアカデミアを信じていた……だから私の夢を裏切ったアカデミアは許さない……そしてそれと同じようなデュエルを穢す輩もな!」

「……そうか。わかった、任せるよ」

「……ッ!ああ!!」

「ヒヒッ!強気な上に良い女じゃねえか……!僕が勝ったらお前を好きにさせてもらおうぞ?」

「勝手にしろ。私が負けるはずがないからな」

「言ったな!?ぶっ潰してやる!」

「デュエル!」

「先行は僕だ!僕は手札から融合を発動!この効果で手札のバーストレディとファザーマンを融合!来い!フェニックスガイ!」

アイツのデッキ、ヒーローデッキだったのか

しっかしね……手札3枚消費した割には弱すぎないかな……?

確かに融合は今のスタンダードでは珍しい部類に入る。だが遊戯王、デュエルモンスターズではいかにアドを取れるかが重要で1枚のカードからいかに次のカードに繋げていくかがゲームを優位に進めるポイントとなる。フェニックスガイは破壊されないカードだけでも……手札3枚消費してまで出すカードでは無いと思う。攻撃力も簡単に超えるモンスターもいるし

ってことは

「カードを2枚伏せて、ターンエンドだ」

ガン伏せか。しかもあの様子だと相当伏せカードに自信があるよ
うだな

「私のターンだ！私は手札から月光黒羊を墓地に送ってデッキから魔法カード融合を手札に加える！」

「へえ〜！君も融合使いなのか〜！僕たち気があいそうだねえ？」

「ほぎげ。貴様の下賤な融合と同じにされたくない。おいそこのお前
！」

「え……？」

「よく見ておけ。これが本当の誇り高い融合だ！私は魔法カード融合を発動！私は手札から月光紅狐と月光蒼猫と月光紫蝶を融合！蒼き闇を徘徊する猫よ！月明かりで輝く獣よ！紫の毒持つ蝶よ！月の引力により渦巻きで新たなる力と生まれ変わらん！融合召喚！現れ出
でよ！月明かりに舞い踊る美しき野獣！月光剣虎姫！」

研ぎ澄まされたナイフを両手に持つ野獣の踊り子がチャキチャキと音を鳴らしながら現れた

「それが君のエースモンスターってわけ？強そうだなくでも無駄だよ？フェニックスガイは戦闘破壊されないモンスターだ。このターン僕を倒すことなどできはしない」

「言ってる、墓地に送られた月光紅狐の効果発動！このカードが効果で墓地に送られた時相手モンスター1体の攻撃力を0にする！」

「何!？」

フェニックスガイ ATK2100↓0

「くっ！なら僕は罫カード緊急脱出装置を発動！これでそのモンスターには手札に、つまりエクストラデッキに戻ってもらおうか！」

「無駄だ！月光剣虎姫は相手の効果の対象にならない！」

「なにっ!?!（だがまだだ……僕のもう一枚はミラーフォース……！これが決まれば……!）」

「更に私は月光白兎を召喚！その効果で墓地の月光蒼猫を特殊召喚！更に月光蒼猫の効果！自分の月光モンスターの攻撃力を倍にする！」

月光剣虎姫 ATK3000↓6000

「そして月光白兔の効果！私の場の白兔以外の月光モンスターの数だけ、相手の伏せカードをバウンスする！」

「そんなミラフオが!!」

「バトルだ！月光剣虎姫でフェニックスガイを攻撃！」

黄色の毛並みを持つ虎の踊り子が敵を斬り殺そうと迫りその二太刀のナイフを振るった。

鬼瓦猛LP4000↓0

「そ、そんな……」

セレナは鬼瓦からカードを奪い取って小学生に返した

「はい、今度はとられないようにしろよ」

「お、お姉ちゃんありがとう！」

「なあに。じゃあ代わりに一つ聞いてもいいか？」

「うん！何でも聞いて！」

「デュエルで人々に笑顔を与えることができる……お前は信じるか？」

「うん！だってさっきのデュエルを見て楽しかったもん！お姉ちゃんの本気が見れたから！」

（ふっ……そうか……こんな私でも……誰かを笑顔にすることができるのか……）

セレナのあの笑顔はなにか吹っ切れたのかな？

と鬼瓦がこちらを睨んで5人ほどいるボディーガードを見ると

「グウウウ……!!始めからこうすればよかったんだ……!おいお前ら！あいつらからカードを奪い取ってやれ！」

あの野郎！

「なっ!!卑怯だぞ！」

「最ッ低……!!」

「うるさい!!こうなったら実力行使だ！やれえ!!」

ボディーガードたちがこっちに……!俺一人なら未だしも……!リンたちを守らないと……!」

とセレナと俺が身構えたその時

「グホウ！」

「ガハッ!？」

「ゲッ!？」

「アッ……」

「グワッ……」

背後から飛び出した見覚えのある4つの影がボディーガードを返り討ちにした

「バレット!!？」

「それに柿本、大判、山部!!？」

「セレナ様、ご無事ですか」

「沢渡さん！俺たちもいるっすよ！」

「沢渡さんがピンチの時には駆け付けるっす！」

「おつとお!?!動くなよ？今までの様子は全て録画済みだ。下手な真似でもしてみろ、お前の地位は更に地に落ちるだろうなあ？」

「……………そ、そんな」

その後は柿本が呼んだ警察によって鬼瓦は逮捕された。後で聞いた話だが鬼瓦は実家からは勘当され、今までの悪事から少年院に入れられたらしい

まあ、それはそうとしてだな……

「お前ら……なにか言い残すことはあるか？」

俺がバレットを含めた柿本たち4人、いやセレナとリンも腕を組んで柿本たちを睨んでいた。

あの後、なぜコイツらがここにいいのかと疑問を持った俺は

「なあお前ら、なんでここににいるんだ？」

「あつ、えつとですね……！俺は家の手伝いが終わったのでちよつと散歩に……！」

「……………じゃあ俺たちの買い物を見て楽しかったか？」

「ツハイ！」

「あつ!!バカ野郎!!」

大判くんがありがたいことに自供してくれたおかげで

「そうかそうか……お前ら……覚悟はいいか？」

とセレナたちも察したようで現在こうしてバレットたちを正座さ

せている

「……何か言い訳があるなら言ってみろ」

「え、えくとですね……3人の邪魔をするのは不粋かと思いましたが……」

「は？なにが邪魔なんだ？もしかしてデートだとも思ってたのか？ただの買い物だけ？なあセレ……ナ……？リン……？」

俺が2人の方を見てみると2人ともリンゴのように顔が赤くなっていた。

え……どういうこと？まさか……間違えられたのが嬉しい……？

2人が3日前のあの日から俺に好意を持っているのはわかっている。俺も鈍くはない

でもデートってわけじゃ……ないよな……？

「／／……私たちの買い物を見てて楽しかったか？」

セレナが真っ赤なまま口を開いて問い詰める

「いや……その……」

「……まあいい、次こんなことしたら……どうなるかわかってるだろうな？」

セレナが少々ドスの効いた声で言う

「「わっ、わっかかりました!!」」

バレットを除く3人が一斉に声を揃えて逃げ出した。バレットも

「セレナ様、申し訳ありません。ですが私は貴方を守ると誓ったので……」

「バレット……私は大丈夫だから、あんまり……その……こういうよ
うな真似はしないでくれ」

「……御意」

バレットも柿本たちの後を追ってこの場を去った

「あーあ……ずつとつけられてなんてな……まあおかげで助かったわけだけど。リン？セレナ？」

2人ともまだ顔が赤く、納得していない様子だった。

「2人とも機嫌直せよ……」

「いやだって……」

「折角楽しかったのに……台無し……」

「もう過ぎたことだろ？……あー！もう！しょーがねえなあ!!高級クレープ奢ってやるから機嫌直せ!!」

「ホントに（だな）!!?」

おおぅ……コイツら歓迎会の時もそうだったけど食い物に関しては遠慮がねえな!!?

こうして2人の機嫌をなんとか取り戻して終わりかと思ったのだが……

「あの……2人とも何やってんだ？」

「……別に」

セレナには右腕、リンには左腕を絡まされてギュツと肩を寄せられた。

え……?まさかこのままクレープ屋に行けってこと?

反論しようと思ったが2人の柔らかな感触が心地良かったので止めることにした

チャンピオンの実力VS覚醒するペンデュラム

あの一件から俺の周りで起こったことは特になく、遂に一年の年月が過ぎた。

尺が短すぎるって？

しよーがねえだろ！早くしねえと魔界劇団が出せねえんだよ！

おっとおっと……作者の本音をぶちまけてしまった……

まあなんにもなかったのは本当だ。あつたとすれば皆でキャンプしたり、ボーリングしたり、ゲームセンターに行ったり……結構色んなことやってたんだ俺たち。まあその辺の日常回は作者に任せよう

そして遂に榊遊矢とストロング石島のスペシャルデュエルの日程が組まれた

この次元に来てからセレナたちもアクションデュエルに興味を持って時々、こうした試合を観に行っているのだ。

そして榊遊矢とストロング石島の試合を見に行こうと思うたがこのイベント主催の企業、LDSは家のグループと関わりを持たないため、予約のチケットが取れなかった。

ということもあつてTVで観ることにした。

「そういえばシンゴ？ 私たち遊矢を見たことないんだけど、どんな奴なの？」

「そうだな……最近は会っていないが、親父さんが失踪したあの時はこれとないぐらい暗い性格だったが、最後に会った時には心から笑って、皆をデュエルで笑顔にしたいって言ってたな。まあ一言で言えば目の前しか見えていないけど何があっても挫けないバカだな！」

「フフツ、それはシンゴもじゃないの？」

「なっ！」

「それはそうだな！」

「セレナ……！お前らなあ……」

確かに行き当たりばったりなりなところも多いけどさ……

「しっかし、沢渡さんの家のTVはやっぱりデカイっすね!!」

「これで3Dっていうんだから最高っすよ！」

セレナとリンは当然いるが柿本たちも居座っている。ちなみにバレットは訓練指導中だ

「お前らなあ……セレナとリンはともかく自分家にTVあるだろ……」

「そんな冷たいこと言わないでほしいっす！」

「折角の沢渡さんの幼馴染の晴れ舞台なんですから！」

「わーってるよ！冗談だ。っとその前にセレナ、リン」

「なに（なんだ）？」

「遊矢を見ても……驚くなよ」

「どういう意味（ことだ）？」

「始まりますよ！」

TVを見てみるとチャンピオンの石島が堂々とステージに立っていたが遊矢が未だに現れていないところを見て、観客からブーイングが巻き起こる

『親父のように逃げたのか!？』

『早く出てこい!!』

とてもじゃないが見ている気持ちのいいものではなかった。

「酷いな……」

「うん……」

と観客が帰ろうとしたその時

「ん？なんだあれ……ピエロ？」

セレナがTVの奥のチャンピオンの後ろにいる物体に目を細めると

『チャンピオン！後ろ！』

観客が呼びかけたおかげでチャンピオンは後ろの変なピエロに気が付き、慌てて距離をとった

『おまえ！神遊勝の息子だな！』

ピエロが衣装を脱ぎ捨てると

「え!?!ユーゴ（ユーリ）!!?」

セレナとリンが信じられないものを見たかのように驚く

「「え!!? 同じ顔!!」」

柿本たちも声を揃えた後、リンたちと一緒に俺を見たので

「そうだ。アイツが榊遊矢だ。俺も驚いたがどうやら同じ顔の人間はセレナたちだけではなさそうだ」

俺の言葉に理解はできたが納得は出来なかったのか榊遊矢をマジマジと見ていた。

そしてチャンピオンと遊矢の戦いの幕が切つて落とされた

『『デュエル!!』』

さーて……ストロング石島のデュエルか……正直アニメで見たことがあるのだが手札4枚消費して呼び出したのがバーバリアンキングだけなんだよなくセレナたちが落胆しないといいんだけど……

『先行は俺だ！俺は魔法カードトレードインを発動！』

は……？

『トレードインで手札のバーバリンキングを捨てて2枚ドロー！そしてカードを一枚伏せる。そしてアクションマジック奇跡を手札に加え、更に手札抹殺を発動！お互いのプレイヤーは全ての手札を捨てて、同じ枚数をドローする！俺はアクションマジックを含めた手札を捨てて4枚ドロー！』

「なるほど、手札交換とアクションマジックを利用したコンボか。中々やるではないか」

『更に俺は伏せていた蛮族の狂宴LV5を発動！俺は墓地からバーバリアン1号とバーバリアン2号を特殊召喚する！そしてこれらを素材にオーバレイネットワークを構築！』

え……ちよつとちよつと……どうなってるの？

『天空の天使よ！現世に降り立ち、原始の力を奮え！エクシース召喚！始祖の守護者ティラス！』

『チャンピオン石島!!いきなりエクシース召喚を成功させたあー!!しかも2ターンの間効果破壊されず、戦闘を行ったバトルフェイズに相手モンスターを破壊する強力エクシースモンスターだ!!』

『次に手札から死者蘇生を発動！墓地のバーバリアンキングを蘇生させる！更にクリバンデッドを通常召喚！そしてカードを1枚伏せて、

エンドフェイズにクリバンデッドをリリースしてデッキから5枚を表向きにしてその中から1枚、魔法カードを手札に加える！俺が手札に加えるのは蛮族の狂宴LV5だ！そして残り4枚を墓地に！これでターンエンドだ』

ストロング石島LP4000手札3枚

バーバリアンキング

レベル8攻撃力3000

始祖の守護者ティラス

ランク4攻撃力2600

ORU2

VS

榊遊矢LP4000手札5枚

「なるほど、今墓地に送ったモンスターを利用する気か」

「そして効果破壊されない攻撃力2600のモンスターと攻撃力3000のモンスターを並べて次のターンに繋げる……すごいわね」

「なんだこのタクティクス……OCGの視点から見れば、まだまだだがアニメ視点で見れば信じられないほどのタクティクスだ。」

「しかもただモンスターを出すだけではなく、後続に繋げるための蛮族の狂宴を手札に加えて、墓地も増やした。次のターンで蛮族の狂宴を発動させれば攻撃力3000の3回攻撃モンスターが出来上がる。」

「こいつが本当にあの石島なのか？」

「柿本たちは俺が魔改造したからわかるのだが……まあ、アニメと全く同じ世界じゃないって可能性もあるしな……」

「っと！遊矢のターンだ。」

『俺のターン！俺は手札からEMディスクカバールヒッポを召喚！』

「遊矢が飛び降りた先にピンクのカバが召喚された」

『そしてEMの召喚に成功した時、手札からEMヘルプリンセスは特殊召喚できる！』

『更にヒッポが特殊召喚されたターンに俺は通常召喚とは別に手札からレベル7以上のモンスターをアドバンス召喚できる！俺はヘルプリンセスとディスクカバールヒッポをリリースしてアドバンス召喚！』

さあー皆様！拍手でお出迎えください！世にも珍しき二色の眼の竜！オッドアイズ・ドラゴン！」

ヘルプリンセスとヒツポがリリースされると二色の眼を持つ竜、オッドアイズドラゴンが現れた。

そして遊矢がその上に乗ってフィールドを駆け巡ってアクションマジックを手札に加えると、そのカードを発動させた

『俺は永続魔法、ワンダーバールンを発動！アクションマジックともう一枚の手札を捨てて相手モンスターの攻撃力を600ポイントダウンさせる！』

「なるほど、これでバーバリアンキングの攻撃力を上回ったというわけか」

「遊矢やるわね」

そして遊矢は間髪入れず次のカードを手札に加える

『ladies and gentlemen！これから奇跡の大逆転劇をお見せいたしましょう！』

「榊のやつ、ここからどうやって決める気だ？」

『このターンで俺を倒す……か。拾ったそのカードはハイダイブ……それに、後ろのカードはワンダーチャンス……だがそれだけでは倒せない……となるとモンスター効果か』

『流石チャンピオン！その通りでございます！オッドアイズ・ドラゴンが相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの元々の攻撃力の半分のダメージを相手に与えます！』

『成程……口だけではないようだ。確かにハイダイブとワンダーチャンスの攻撃力を上げた二回攻撃でテイラスとバーバリアンキングを破壊されれば戦闘ダメージ1500と1100の合計に加えて、効果ダメージ1300と1500で俺は負ける……だがそれで倒せると思ったのなら甘い！手札のエフェクト・ヴェーラーを捨てて効果発動！』

『なんだって!?!』

『オッドアイズ・ドラゴンの効果をこのターンの間無効にする！』

上手い。絶妙なタイミングで効果発動をするのを見たところ、観客

を沸かせる技量も相当のものだ

『ぐっ……だが破壊はさせてもらおう！バトルだ！オッドアイズ・ドラゴンで始祖のテイラスを攻撃！そしてこの時、ハイダイブを発動！攻撃力を1000ポイント上げる！』

『ふっ……受けてやろう』

テイラスは抵抗虚しく破壊されたがオッドアイズドラゴンの効果でダメージを与えることができなかった遊矢にとってはかなり厳しい状況だ

石島LP4000↓2500

『更にアクションマジックワンダーチャンスを発動！もう一度攻撃できる！行け！オッドアイズ！バーバリアンキングを撃破しろ！』

『それを通すわけにはいかねえな。墓地のネクロガードナーの効果発動！除外して攻撃を無効にする！』

『くっ……！これで俺はターンエンドだ』

またアクションマジックを探しに行く遊矢

「遊矢の奴は……悪く言えばアクションマジックに頼りきりだな」

「そうっすね……」

「確かに間違っつてはいないっすけど……」

セレナが厳しいことを仰るが、まあ間違っつてはいないな……

「俺のターン！俺は貪欲な壺を発動！墓地の5体のモンスターをデッキに戻して2枚ドロウする！そして蛮族の狂宴LV5を発動！墓地からバーバリアン1号、バーバリアン2号を特殊召喚する！更に攻撃力2000以上のモンスターがいることにより手札のオーバーレイブースターを特殊召喚する。更に手札から光属性を指定して幻惑の巻物を発動！バーバリアン2号を光属性にする！そしてオーバーレイブースターと光属性となったバーバリアン2号でオーバーレイネットワークを構築！星々の光よ、今大地を震わせ降臨せよ。エクシーズ召喚！現れよセイクリッド・プレアデス！』

ハアアア!!? プレアデスうう!!? なんでアンタがそのカードを使っているのよおお!!? 北斗くんのアイデンティティは!!?

『チャンピオン!! またしてもエクシーズモンスターを降臨させたあー

!!その効果は1ターンに1度、オーバーレイユニットを使って相手カードをバウンスさせるといふ強力無比な効果だぁー!!』

『俺はセイクリッド・プレアデスの効果発動!オーバーレイユニットを一つ使ってワンダーバルーンをバウンスさせる!』

『なっ?!?くっ……!!』

『更に永続罠オープン!バーリアンレイジ!これで俺のバーリアンキングの攻撃力は1000ポイントアップだ!……後ろのハイダイブを使ってカウンターを仕掛けようとの魂胆だろうが……そのような小細工は通用せん!更にバーリアン1号をリリースしてこのターン、バーリアンキングに2回攻撃の能力を与える!』

バーリアンキング攻撃力3000↓4000

『行け!バトルだ!バーリアンキングでオッドアイズを攻撃!』

『くっ……!アクションマジックハイダイブを発動!オッドアイズの攻撃力を1000ポイントアップさせる!』

『だがバーリアンキングの攻撃力の方が上だ!やれ!』

バーリアンキングがその拳を振るうと遊矢が吹き飛ばされた。

『バーリアンレイジの効果を受けたバーリアンキングと戦闘を行ったモンスターは破壊されず、手札に戻る。だがこれで止めだ!バーリアンキングの二回目の攻撃!』

その攻撃が遊矢に当たろうとした時、

『アクションマジック!回避!攻撃を無効にする!』

なるほど。吹き飛ばされた先に落ちていたのか。危機一髪だな

『むっ!凄いだか……ならばセイクリッド・プレアデスで攻撃!』

再びアクションマジックを探そうとするがオッドアイズを失った今ではその速度はやはり違うよううで攻撃をまともに食らってしまった。

『うぁー!!』

遊矢LP4000↓1000

バーリアンキングの戦闘ダメージ500とセイクリッド・プレアデスの直接攻撃のダメージ2500の合計で遊矢のライフは一気に刈り取られてしまった。

「この勝負……決まったか」

おいおいおい……!!?まさか遊矢がペンデュラムを生み出せないまま終わるんじゃないのか……!!?

『逃げずに俺と戦ったことは褒めてやろう。だがお前にはまだ早いステージだったようだな。カードを1枚伏せてターンエンドだ』

『俺は……まだ負けてない!勝負はここからだ!』

『ならば来い!』

『俺の……俺の……ターン!よし!俺も魔法カード貪欲な壺を発動!墓地のモンスターを5体デッキに戻して2枚ドロ!更に手札断殺を発動!手札に加えたアクションマジックとワンダーバルーンを捨てて2枚ドロ!ツ!まだまだ!強欲で貪欲な壺を発動!デッキから10枚を裏側表示で除外して2枚…………ドロオ!!』

とその時遊矢のカードが光り出した

『なんだ!?なにが起こってる!』

そして遊矢が

『俺は!スケール1の星読みの魔術師とスケール8の時読みの魔術師で!Pスケールをセッティング!』

「何だなんだあ!!?」

『これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能!揺れる……!魂のペンデュラム……!天空に描け光のアーク!P召喚!現れよ!我が僕のモンスターたちよ!EMウィップバイパー!EMドラミングゴング!そして……!二色の眼持つ竜!オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン!』

遊矢LP1000手札1枚

(スケール1) 星読みの魔術師

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン

レベル7攻撃力2500

EMドラミングゴング

レベル5攻撃力1600

EMウィップバイパー

レベル4 攻撃力1700
(スケール8) 時読みの魔術師

VS

ストロング石島LP2500

バーバリアンキング

レベル8 攻撃力4000

セイクリッド・プレアデス

ランク5 攻撃力2500

『なんだなんだー!!? 榊選手! 一気に3体のモンスターを召喚したあー!!』

「これは……!!?」

「すげえ……」

そしてストロング石島は動揺するものの目の前の戦いに意識を戻す

『セイクリッド・プレアデスの効果発動! ORUを使ってオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを手札に戻す!』

『その効果に対して俺は速攻魔法禁じられた聖杯を発動! 攻撃力を400ポイント上げて効果を無効にする!』

セイクリッド・プレアデス 攻撃力2500 ↓ 2900

『ウィップバイパーのモンスター効果! 相手モンスターの攻撃力と守備力の数値を入れ替える!』

『なにっ!?!』

バーバリアンキング 攻撃力4000 ↓ 1100

『そしてバトルだ! オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンでバーバリアンキングを攻撃! 螺旋のストライクフォース! そしてこの時、ドラミングゴングの効果で攻撃力を600ポイントアップ!』

『なら俺はアクシヨンマジック回避を“ビーツ! ビーツ!” なに!?! 発動できない!?!』

『天空を見定める星読みの魔術師よ! その深淵なる力であだなす敵を封じよ! ホロスコープ・デイビネイション! 星読みの魔術師のP効果! 俺のPモンスターの戦闘時、相手はダメージステップ終了まで魔法

カードを発動できない!」

『なら俺は罠カードバーバリアンハウリングを〃ビーツ!ビーツ!〃なに!?これも!?』

『時空を見定める時読みの魔術師よ!その緻密なる力で我を守護せよ!インバース・ギアヴィス!Pモンスターの戦闘時!相手は罠カードを発動できない!』

『なんだと!?だが俺のライフは500で耐える……次のターンで……!』

『オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンが相手モンスターとバトルする時!戦闘ダメージが2倍となる!リアクションフォース!』

『なにっ!?バカなアアア!!』

石島LP2500↓1500

『決まりました……勝者は……誰が予想したでしょう……!大逆転を収めた……榊遊矢あー!!』

おーおー……原作とは違う形だが勝ったな……

「遊矢も中々見事だったな」

「そうね。最後まで諦めなかったから勝てたのよね」

「俺……感動したっす……!」

「俺も……!!」

「しかしP召喚か……すげえのが出たなあ……新たな召喚法だろ?」

そうだな……ここにはバレットがないし断片的なデュエルしか見ていないセレナは俺がP召喚を使えることを知らない

ま、そのうち話しますか。だが……

俺は画面に映っている遊矢を見て、物語が加速すると感じた。

エンタメリスト対決

「んで此処っすか？遊矢さんがいる塾って」

大判が聞いてくるが、外装がアニメ通りだったから間違いないとは言わないが合っていると返しておく。

「遊勝塾といえればあの榊遊勝が塾長をしていた塾でその……良い意味でも悪い意味でも有名っすよね」

―榊遊勝

遊矢の父親で彼の憧れの対象でもあるエンタメデュエリスト。アキシオンデュエルのパイオニアとしても名をはせたが3年前のストロング石島との対戦の際に行方不明となり卑怯者と呼ばれることになってしまう。アニメでは赤馬零王を止めるためにエクシース次元に跳んで現地でエンタメデュエリストとして知られるがアカデミアのエド・フェニックスとのデュエルの後、何者かの介入によって融合次元に跳ばされることになってしまう。そこでアカデミアから脱走した者たちを天上院明日香と共に匿って、彼らの手助けをしていることとなっている

まあ、事情を知らない人間から軽蔑されいているがああ赤馬零児を始めたとする彼のファンからは今でも尊敬されている。

「ここに私と同じ顔の柊柚子って奴がいるのか？」

「ああ、遊矢の父さんと彼女の父さんは先輩後輩の関係らしいからな」
「しかし……凄い人ね」

リンがそう呟くのも無理はない。なにせ100人以上はいるであろう行列に俺たちは並んでいるのだから

んでやっとな順番が来たかと思ったら塾内に入りきらなくて外から見ることとなった

……30分後

遊矢が柊柚子とデュエルでペンデュラム召喚を見せようとしたのだがアニメ通りスケール4のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンとスケール8の時読みの魔術師では手札のレベル2とレベル3のモンスター召喚できずそのまま柚子に敗北した。

それを見た子供たちは卑怯者と遊矢を罵倒しながら帰っていき、
とした時に俺は中に入り、置いてあつたメガホンを取ると

「待てよお前ら！これからが真のデュエルだぜ！」

―誰だ……？

―急に出てきたぞ？

「シンゴ……!!？」

「何やってるの!!？」

帰ろうとしていた奴等が歩みを止めて俺に注目する。

そして昔と面影が変わっていない幼馴染に久しぶりの挨拶をする

「よう！久しぶりだな遊矢！」

「誰……って、シンゴ!!？」

「そう！カードに愛されたグレイトフルな俺様、沢渡シンゴだ！」

俺が高らかに言い放つと

「沢渡だつて!!？」

「あの戦略の帝王の!!？」

「すげえ……!!！」

「でもなんでここに来たんだろ？」

「バーカお前、あの人もペンデュラム召喚を見に来たんだろ？まあ、その本人はインチキデュエリストだったけどな」

「戦略の帝王？」

「お前知らねえのか!?様々なカテゴリーのカードを使って相手を打ち倒す様からあの人についた異名だよ」

外野がなにやらほざいているが俺は気にせずに遊矢に近づく

「よ！3年振りか？元気にしてたか？遊矢」

「ああ！お前に言われてから俺は自分を偽らないって決めただ!!それに新しい召喚法も身に着けたんだけど……」

「まあさっきのはダサかったぜ！」

「うっ……」

自分でも自覚しているのかしゅんとなる遊矢

「でもな、ストロング石島との戦い。最高のエンタメだったぜ！俺も
ビリつとなつた！元氣そうで何よりだ！」

「うん！俺はこんなところで落ち込んでなんかいられないからな！それで何しに来たんだ？」

「まあ、そうだな。いい機会だから久しぶりの挨拶と友人の紹介ってのもあったが……遊矢、俺とデュエルしてくれないか？」

「え……？俺とシンゴが!？」

「あの人が直々にデュエルを申し込んだぞ!!？」

「マジかよ!？」

「でも勝負は見えているだろ」

「そうだ。お前の新たな可能性であるペンデュラム召喚を見せてくれ」

「でも俺は……」

「逃げるのか？」「ツ……!」「ここで言われっぱなしで逃げるのか？それはエンタメ以前にデュエリストとしてのプライドが傷つかないのか？憧れの親父さんみたいなデュエリストになるんじゃないか？よ」

「わかった！皆聞いてくれ！俺は今度こそペンデュラム召喚を成功させて見せる！だから俺のデュエルを見てくれ！」

遊矢の言葉に塾内にいた人間は帰る足を止めるがデュエルコート内に二人の人物が入ってくると

「ちよつとちよつと！いきなり出てきて勝手に決めないでくれる!？」

「ああ、そりやすまなかった。初めまして、俺は沢渡シンゴ」

「つてことはあなたが遊矢が言ってた……」

柚子は俺だとわかると

「ありがとうね。遊矢を……遊矢のお父さんを庇ってくれて」

「気にするなよ。昔のことだ」

「それでもよ。遊矢の幼馴染として礼を言っておくわ」

「うむ。俺も遊矢の友として感謝する。紹介が遅れた。俺は権現坂昇」

「さてと、急に決めちゃって悪いんだが……」

「ああ、驚いたけど全然オツケーよ。むしろ礼を言いたいぐらいだわ」「じゃあ準備を始めてくれるか？」

「任せて！」

「こうして準備が済むと

「じゃあ遊矢、行くぞ」

「ああ！」

「戦いの殿堂に集いしデュエリストたちが！」

「モンスターと共に地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最終進化系！」

「「アクシヨ〜ン……デュエル!!」」

「先行は俺だな。俺はフィールド魔法チキンレースを発動！」

『「フィールド魔法だつて!?!」』

「シンゴ!?!アクシヨンマジックを使わない気か!?!」

「まあ見てなって！その前にチキンレースの効果を説明しよう。ライフが相手より少ないプレイヤーは受けるダメージが全て0になる！そしてもう一つ！お互いのプレイヤーは1ターンに1度、1000ポイントのライフを払って3つの効果を使える！一つはデッキから1枚ドロウする！もう一つはチキンレースを破壊する！最後は相手のライフを1000ポイント回復させる！俺は一つ目の効果を使うぜ！1000のライフを払ってドロウ！……そしてSRベイゴマックスを特殊召喚！」

フィールドに現れたのは連結されたベイゴマ

沢渡シンゴLP4000↓3000手札4枚

「このカードは自分フィールド上にモンスターがいないとき特殊召喚できる！更に召喚に成功した時、デッキからベイゴマックス以外のSRモンスターを手札に加える！俺はタケトンボーグを手札に加えて、自身の効果で特殊召喚！このカードは自分フィールド上に風属性モンスターが存在する時、手札から特殊召喚できる！更にタケトンボーグをリリースして効果発動！デッキからSRモンスターを特殊召喚する！現れる！SR三つ目のダイス！」

次々とモンスターが展開されていく。やっぱりSR強いよな。リ
ンに初めて見せた時は驚かれたけど。え？魔界劇団は使わないかつ

て？遊矢が使う前に俺が使ったらエンタメが足りないだろう？

……ま、それもあるが手札に魔界劇団来てないんだよな……今引いたベイゴマックス以外のカードは1枚を覗いて現状では手札交換できない魔界台本だし……

「……俺はレベル3のベイゴマックスにレベル3の三つ目のダイスをチューリング！」

「ツ！その召喚法は！」

「十文字の形持つ不死身の魔剣よ。その力で全ての敵を切り裂け！シンクロ召喚！レベル6！HSR魔剣ダーマ！」

OCGではけん玉モンスターとの相性もあるモンスター

「シンクロ召喚……！シンゴはシンクロ召喚ができるのか!? LDSだけの！」

別に召喚法に所属も関係ないと思うんだけどな……

「……魔剣ダーマの効果！墓地のSRベイゴマックスを除外して相手に500のダメージを与える！」

遊矢が慌ててアクションマジックを探しに行くがそれよりも早く魔剣ダーマのバウンドダメージが遊矢を襲う

榊遊矢LP4000↓3500手札5枚

「ぐううう……！」

「俺はこれでターンエンド」

「すげえ……!!沢渡さん、シンクロ召喚ができるのか！」

「あの人LDS所属なのか？」

「いや、あの人はどこにも所属してないらしいぜ？」

「マジかよ……独学で身に着けたってことか……」

「俺のターン！ドロー！ツ……！」

遊矢がドロートしたカード、あれは恐らくPカードだな
だが先ほどの失敗のせいか迷っているように見える

「遊矢、お前怖いんだろ？失敗するのが」

「……！」

遊矢が俯いてしまう

「でもわかるぜ!!」誰だって未知のことに挑戦するのに対して不安を

なにかしら抱くはずだ。別にそれは構わない。でもそれで恐れていてばかりだと前に進めないぜ？お前が前に進みたいって思うなら時には踏み出す勇気も必要だぜ」

「俺は……」

遊矢は俯いた顔を上げると

「俺はスケール1の星読みの魔術師に！スケール8の時読みの魔術師で！Pスケールをセツティング！」

遊矢がカードをセツトすると青い柱が浮かび上がり、その中に二人の魔術師が現れる

「これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！揺れる……！魂のペンデュラム……！！天空に描け光のアーク……！ペンデュラム召喚！来い！俺のモンスターたち！EMウィップバイパー！EMドラミングゴング！そして……！二色の眼持つ竜！オッドアイス・ペンデュラム・ドラゴン！」

遊矢がペンデュラム召喚を成功させると

「すげえ!!」

「これが……ペンデュラム召喚……!」

「デマじゃなかったのか!」

「あれって……ストロング石島を倒した時のモンスターたちじゃねえか!」

「すげえじゃねえか遊矢!」

「シンゴのおかげだよ!お前の言葉が俺を前に突き動かしてくれた!でも!勝負は譲らない!」

「そりゃこつちもだ!来い遊矢!」

「ああ!おたのしみはこれからだ!まずは俺もチキンレースの効果を使う!その効果でチキンレースを破壊する!ウィップバイパーのモンスター効果!魔剣ダーマの攻守を入れ替える!」

榊遊矢LP3500↓2500

魔剣ダーマATK2200↓1600

「行け!バトルだ!オッドアイス・ペンデュラム・ドラゴンで魔剣ダーマを攻撃!その時ドラミングゴングの効果発動!オッドアイズの攻

撃力を600アップさせる！」

ー待てよ……これって……

ーオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンの効果は戦闘ダメージを2倍にするから……

ーもしかして決まっちゃうんじゃねえか!?

「行け！螺旋のストライクバースト！」

「甘いぜ遊矢！墓地にある三つ目のダイスの効果発動！自身を除外して攻撃を無効にする！」

「くっ！ならウィップパイパーで魔剣ダーマを攻撃！」

攻撃力が下がった魔剣ダーマはウィップパイパーの攻撃を受けて爆発した

沢渡シンゴLP3000↓2900

「更にドラミングゴングでダイレクトアタック！これで……ターンエンド！」

沢渡シンゴLP2900↓1300

「遊矢」

「うん？」

「どうだった？自分の新たな可能性を発見した気分は。ワクワクするだろ？」

「ああ！これから父さんの……いや、ペンデュラムという俺だけのエンタメを見せてやる！」

……

「……遊矢」

「なんだ？」

「……ペンデュラムが自分だけのものだと思わない方がいいぞ」

「ど、どうしてだ？」

「教えてやるよ。自分だけのものなんてこの世にはないことを！俺のターン！ドロロー！」

よし！このカードなら！

「自分フィールドにカードが存在しない時、メインフェイズ時に墓地の魔剣ダーマを特殊召喚できる！来い！魔剣ダーマ！ただしこの効

果を使ったターン、俺は通常召喚ができない」

「何を狙っているんだ……!?!」

「そしてアクシオンマジック、回避を手札に加えて手札抹殺を発動。5枚捨てて5枚ドロー」

「俺もアクシオンマジックを手札に加えて3枚捨てて3枚ドロー!」

「更に自分フィールドにシンクロモンスターが存在する時、手札のシンクロン・リゾネーターは手札から特殊召喚できる」

『ケヒヒツ!』

「俺はレベル6の魔剣ダーマにレベル1のシンクロン・リゾネーターをチューリング。冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の花よ、開け。シンクロ召喚!来い!ブラックローズドラゴン!」

花が芽吹くようにその翼を広げる赤い薔薇の竜

「ブラックローズドラゴンがシンクロ召喚に成功した時、フィールドの全てのカードを破壊できる」

「なんだって!?!」

「やれ!ブラックローズガイル!」

ブラックローズが雄叫びをあげると花卉と共に嵐が吹き起り、全てのカードを破壊せんと暴れる

「くっ!アクシオンマジック、ミラーバリア!このターン俺のオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンは効果で破壊されない!」

「凄いだか。だがこれで終わったなんて思うなよ?俺はスケール0のメローマドンナと、スケール4のカーテンライザーでPスケールをセッティング!」

「え………?」

俺がカードをペンデュラムスケールにセットすると

『ペンデュラム!!!』

周りからどよめきが起こり

「シンゴがペンデュラム………!!!」

「マジっすか!!!」

「ど、どうしてシンゴがペンデュラムを………!!!」

「なんだ?まさかお前だけの力だと思ってたのか?それならとんだ思

「上がりもいいところだな」

「なんだと!？」

「ならあるたよえ話をしよう。有名なデュエリストが使っていた戦法やデュエルスタイルを誰かが真似しないでも思うか？」

「それは……………」

「俺がペンデュラムを使ったのがショックだったか？ああ、確かに思いついていたお前にとつたらショックだよなあ?。」

「……………」

「でもな、それで立ち直れないようじゃエンタメデュエリストとしてプロなんか目指せると思うか？あの榊遊勝だって、模倣されたり対策されたりしても諦めたか？そこまでの奴だったならチャンピオンなんてものになれたとでも思うか？」

「父さんは……………違う！父さんは諦めたりしなかった！どんな時も……皆を笑顔にするようなデュエルを……………」

「だったら俺がペンデュラムを使つたぐらいでへこむな！へこんだとしても立ち直れ！あの榊遊勝を超えたいなら！」

「ツ…………!!ああ！俺は諦めない!!ペンデュラムを模倣されようが俺は俺だけのエンタメデュエルを切り開いてみせる！」

「そうこなくっちゃな!!なら続きだ！カーテンライザーのP効果！説明しよう！P効果とはPカードをPスケールと呼ばれる第一スロットと第五スロットのどちらかに魔法カード扱いで置くことによって、永続魔法扱いで発動する効果のことだ！そして自分フィールドにモンスターが存在しない時、Pゾーンのこのカードを特殊召喚できる！来い！カーテンライザー！更に手札に加えたビッグスターをPゾーンにセッティング！そしてビッグスターのP効果！カーテンライザーをリリースして墓地の魔界台本を1枚手札に加える！俺は墓地から魔界台本舞台準備を手札に加える！おつと！だがこの時、リリースされたカーテンライザーは墓地には行かずエクストラデッキに表側表示で加わるぜ」

「どういうことだ!？」

「ここでまた説明！Pモンスターはフィールド上から墓地に送られる

時！墓地には行かずエクストラデッキに表側表示で加わる！」

ーエクストラデッキに加えて、どうするつもりなんだ？

ーああ……

「そして手札から魔法カード魔界台本舞台準備を発動！手札のデビルヒールを表側表示でエクストラデッキに送って2枚ドロ！そして死者蘇生を発動！墓地から蘇らせるのは光帝クライス！」

『フンッ！』

「いつのまに……そうか！手札抹殺の時に！」

「そうだ！そして光帝クライスの効果！召喚に成功した時、場のカードを2枚まで破壊できる！俺が破壊するのはPゾーンのビッグスターとクライス自身だ！この効果で破壊したカードの枚数分カードをドロ！する！2枚ドロ！」

「自分のモンスターを破壊した……!?!」

これで準備は整った……!?!

「俺は更にスケール8のファンキーコメディアンをPゾーンにセットイング！さあー！お楽しみはこれからだ！セットされたスケールは0と8！よってレベル1から7のモンスターが同時に召喚可能！P召喚！手札からダンディ・パイプレイヤー！そしてエクストラデッキからビッグスターにカーテンライザー！」

ーエクストラデッキから直接モンスターを召喚した……!?!

ーマジかよ……!?!

「シンゴ、どういうことだ……!?!」

「最後の説明！Pスケールで呼び出せるのは手札のモンスターだけではない！エクストラデッキに送られた表側表示のPモンスターも呼び出せるのさー！」

「そんなことができるのか……!?!」

「おまえ知らなかったのかよ」

「うっ……」

「さあー！いよいよクライマックスだ！ダンディ・パイプレイヤーの効果！自身をリリースすることでエクストラデッキの表側表示のレベル8の魔界劇団Pモンスターを特殊召喚できる！来い！デビルヒー

ル！」

『ヌッフッフ……!!』

現れたのはその巨大な手で全てを握りつぶさんとする悪魔

「デビルヒールの効果！特殊召喚した時、自分のフィールドの魔界劇団Pモンスターの数だけ相手モンスター1体の攻撃力を10000ダウンさせる！」

「オッドアイズ！」

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン ATK2500↓0

「更に俺は手札から魔界台本魔界俳優融合を発動！カーテンライザーとビッグスターで融合召喚する！」

「融合召喚!？」

「舞台を飾る演劇者たちよ、暗黒の渦で一つとなりて新たな舞台に君臨せよ！融合召喚！魔界劇団マキシマムアクションスター！」

『ヒャーハッハッハッハ!!』

ー融合召喚も使えるのか!?

ー噂には聞いていたが……

「そしてマキシマムアクションスターの効果発動！デビルヒールをリリースすることでこのターン相手は魔法、罫を発動できない！」

「なんだって!？」

「そしてデビルヒールの攻撃力の半分！攻撃力をアップする！」

魔界劇団マキシマムアクションスター ATK3000↓4500

「行け！バトルだ！マキシマムアクションスター！オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンを攻撃！ファンタステイク・スパイラル！」

マキシマムアクションスターの錐もみキックがオッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンに直撃するとその余波が遊矢を襲って残りのライフを削り取った

榊遊矢 LP2500↓0

遊矢の今の心境を表すならとても晴れ晴れしていた。

親友がペンデュラムを使ったかなんてどうでもよくなるぐらい今は目の前のデュエルが楽しかった。それは久しぶりに親友と戦えたのもあるが心に残っていた鬱憤を晴らせたからだろう……

「大丈夫か？遊矢」

「シンゴ……」

「まあ、楽しかったぜ。久々のお前とのデュエル」

……それならよかった。自分の信じるデュエルは相手も含めて楽しむというデュエルだからだ。勿論それを通すには力もいることを知っている。だからこれから強くなっていけばいい

「それに見てみろよ」

そう言われて顔を上げてコートの外に視線を向けると

―楽しかったぞー！

―さつきはすまなかった！

―お前は立派なエンタメデュエリストだ！

自分を褒め称える歓声。それが荒んでいた自分に聞かせてやりたい自分の求めていたものだった

だから今、こんなにも清々しいのだろうか……

あの後、遊勝塾への入部希望者が続々と名乗りを挙げたが、塾長曰く、そこまで教える人材やソリッドビジョンの都合、スポンサーもないこと等々、入れる人数に制限がかかってしまうことを聞くと、諦めて帰っていく人が続出。

つと！遊矢に柿本たちを紹介しないとな

と思った時

「沢渡くんだったっけ？」

「そうですが、貴方は？」

「私はこの塾の塾長、柊修造だ。それと礼を言わせてくれ！遊矢を立ち直らせてくれてありがとう！」

いきなり手を掴まれてブンブンと上下に振り回された。

ちよっ！ちよっ！痛い痛い！

柚子が止めてくれたけど……

遊矢たちと一緒にデュエルコートから出ると

「お前が柚子か！」

「すごい……本当に私にそっくり……」

「「え!!」」

遊矢たちの声はもった

はあ……そういえばなんて説明するか考えてなかったな……

不審者との邂逅

沢渡さんと遊矢が遊勝塾で闘っている頃、LDSモニタールームでは

「社長！強力な召喚エネルギーを検知しました！」

「召喚反応は？」

「ペンデュラムです！」

「ということは榊遊矢か？」

「いえそれが……ペンデュラムの反応が二つあります！」

「なに!?すぐに使用者を突き止める！」

「はい……召喚エネルギーの種類があるデュエリストと一致しました！」

「誰だ？」

「沢渡シンゴです！」

「沢渡……か」

「更に彼からシンクロ、融合の召喚反応も検知しました！」

「なんだと!？」

その場が騒然となる。この舞網市ではエクストラからの召喚方法自体が珍しい。その上、複数の召喚方法を操るデュエリストなどこの場の者たちは一名以外を除いて知らない

「社長、やはり彼と接触するべきでは？」

社長と呼ばれた男、赤馬零児は組んだ腕を机に置くと

(沢渡シンゴ……やはり彼には謎が多い。何処にも所属していないにも関わらず多数の召喚方法を手にしているとは……方法だけならともかくどうやってカードを手に入れたのだろう……他次元のデュエリストの可能性が考えられるが彼の戸籍には何も不審な点がない。そして……ペンデュラムをも操る……か。やはり中島の言うとおり接触するべきなのか……?だがタイミングを見誤れば……)

沢渡に対しての警戒度を上げて、これからの対応を考えていた

……

「えー……つと、それじゃセレナとリンは記憶喪失で倒れていたところ

ろを沢渡に拾われたってこと?」

「いや、アカデミアから逃げ「う、うんそうなの! 自分に関する記憶が名前以外すっぽり消えちゃって!」

リンナイス。セレナにウソは無理みたいだな……真っ直ぐな性格だからな……

「しっかしそれにしてもリンお姉ちゃんとセレナお姉ちゃん、本当に柚子お姉ちゃんにそっくり」

「痺れるぐらい似ているぜ」

「アハハ……私も初めて会った時は驚いたわ」

リンは孤児院で子供の相手をしていたからか対応に慣れている感じだった

「すっごい似てるよなく実は三つ子だったりってオチじゃないかな?

柚子」

「い、いや確かにそう言われても仕方ないぐらい似てるけど……」

遊矢がそう呟くと俺にリン、セレナと柿本たちはなんとも言えない表情になった。

あと一人、同じ顔の人物がいるなんて言えない……

ま、まあそれは置いておこう!

「遊矢、もうじき行われる舞網チャンピオンシップ、お前は出るか?」

「ああ! 勿論出るさ! シンゴ、お前も出るのか?」

「ああ! って言いたいところんだけど……俺どこにも所属してないんだよな……」

一応無所属でも出れることは出れるのだが、塾に所属していないと確認事項の書類などや公式戦の勝率の提出など恐ろしく面倒なのだ。

うーん……やっぱり今からでも何処かに所属しよっか……?

「じゃあシンゴ、ウチに来ない?」

「柚子?」

えっ、いきなり? でも確かに今の俺からすれば美味しい話だけど……

「それに融合召喚やシンクロ召喚も教えてくれたら助かるな……つてのもあるし……」

……なるほどね。エクストラデッキからの召喚方法も教えてもらいたいと……別にいいんだけどね？一つだけ懸念があるんだよな……
「勿論タダとは言わないわ。召喚方法の講義に対してのお礼もするから……」

「いや別に教えるのはタダでもいいんだけどさ……所属するのはちよつと考えさせてくれないか？」

「シンゴ……？」

「何故だ……？」

柿本たちも訳のわからない顔をしていたがこればかりはすぐに決められない

「……うん、わかったわ。無理に理由を追求するのもよくないからね」

「ありがとう。じゃあ帰ろっか」

「あつ……うん」

「……わかった」

「……じゃ、じゃ！また今度！」

「お邪魔しました！」

「今日はありがとうな！」

外に出て、遊勝塾から離れるとリンとセレナが聞いてくる

「ねえ、なんであんなこと言ったの？入るのになにか問題でもあるの？」

「私もそう思った。何故だ？シンゴ」

「……柿本、お前から見てペンデュラム召喚ってどういうものだと思う？」

「え？そ、そりゃあ新しい召喚方法で、驚きましたが……」

「それがどうしたんだ？」

セレナが疑問符を浮かべる

「……また違う質問をするが戦争を仕掛ける時、相手側の情報を知らないまま闘おうとするか？」

「……さつきからどうしたんすか？」

「……それでどう思う？」

「うーん……それはないと思いますね。相手の戦力や情報を知らない

まま戦うのは自殺行為ですから。デュエルにおいても事前に情報があるかないかで大分変わりますし」

「そうだ。戦争において情報は時に力よりも価値を示すことがある」

「確かにそうですが……でもそれが何か関係があるんですか？」

「じゃあアカデミアがエクシース次元に戦争を仕掛ける時、事前に情報を仕入れなかったと思うか？」

「「「あ……!!」」」

「そうだ。アカデミアはエクシース次元に戦争を仕掛ける前に何かしらのスパイを送り込んでいた可能性がある。エクシース次元の黒咲瑠璃を攫うの時にも事前に情報を仕入れていた可能性は高い。リンを攫ったのならシンクロ次元にも誰かを潜入させていた可能性も否定できない。なによりこの次元での目的が柊柚子の可能性はバレットが言うようにほぼ確実だ。ならこの次元にもスパイを送り込んでいる可能性は充分にある」

「た、確かに……」

「でもそれがなにか関係があるんですか？」

「柿本、おまえさっき言ったよな？ペンデュラム召喚は新しい召喚方法だって。戦争組織のアカデミアが脅威になりそうな情報を仕入れないと思うか？」

「まさか……」

「遊勝塾にもアカデミアのスパイが潜り込む可能性は充分にあるな。よくてペンデュラム召喚の情報漏洩……最悪なのがリンみたいに柚子が攫われることだな。俺のせいでリンやセレナを巻き込むわけにはいかない」

「シンゴ……」

「……………」

「で、でも沢渡さん。柊さんはどうするんですか？もし攫われたら……」

「出来るだけ警戒はするつもりだけど……ずっと守れるわけじゃない。機会を見て遊矢に話すよ」

「そうですか……」

重い空気が漂うが

「……ねえ、シンゴ」

「なんだ？」

「シンゴは……私たちのこと「瑠璃っ!!」え……？」

後ろから突き刺すような大きな声が聞こえたので振り向くと青紫のコートを着て、サングラスと赤いスカーフで顔を隠した紛うこと無き不審者がいた

「瑠璃！何故ここにいる！アイツらから逃げてきたのか!?それに何故瑠璃が2人いるんだ!?!」

不審者は横にいる俺たちを気にすることなくリンとセレナに近づくと

直後リンやセレナが呟く

「誰……?」

V S 不審者1

「瑠璃……？なにを言ってるんだ……？俺はおまえの兄だ！どうしたんだ瑠璃！」

いや、いきなり不審者に自分の兄だと言われても真に受ける人間などいるわけがない

それに名前からして人違いだし。そのことをリンとセレナが説明しようとするが……

「瑠璃！何故だ！何故俺がわからない！それに何故2人になっているんだ！」

いや、2人いる時点でどっちかが人違いだと気づくはずだろ。なのに両方とも自分の妹と勘違いしてるし

「まさか……アカデミアに何かされたのか!?許せん……！アカデミアめ……！」

アカデミア……？それに今気づいたけど瑠璃って……！まさかコイツ……

リンとセレナに近づいた不審者がサングラスとスカーフを外すと顔が曝される

その男を俺は知っていた。同時に非常にマズイ状況であると理解した

黒咲隼。融合次元のアカデミアに侵略されているエクシード次元の人間であり、その名の通りエクシード召喚を主流としたデュエルをする鉄の意志と鋼の強さを持つネタキャラ強者。そして今の状況を見てわかるようにリンとセレナと同じ顔をしたアカデミアに囚われている妹がいる。

……つまり何がマズイのかというところ

「さては貴様らアカデミアか！答えろ！瑠璃に何した！」

ーアカデミアと勘違いされてしまうわけだ。山部と柿本もこの男がエクシード次元から攫われた黒咲瑠璃の関係者とわかったからか、眉間に皺を寄せて、困った顔をしていた。しかも厄介なことなのに男、黒咲は思い込みが激しいので誤解を解くのも難しい。それでも

やはり話し合いで解決したいので

「誤解だ。それにコイツらはお前の言う瑠璃じゃない」

敵意を示すことなく穏やかに話す。柿本たちも余計なことを口走らせないように後ろに下げる

……が

「黙れ！誰がアカデミアの言うことを信じるか！」

ダメだこりや……こうなったら……

逃げよう！

と思った矢先に黒咲がリンに近づき

「早く俺たちのところへ帰るぞ！ユートが待って……おい」ツ!？」

連れて行こうとするためなのか引つ張ろうとしたその手を俺はつかむ。

リンはユーリに連れ去られた際のトラウマを思い出したのか震えていた

「なにおまえの勝手な解釈でリンを連れて行こうとしてるんだ……？こつちが下手に出ているからって、ギャーギャー怒鳴りやがって……挙句の果てにリンを連れていく……？」

自分でもわかるぐらい冷たい声が出ている

「巫山戯るなよ……!!これ以上リンを苦しめるな……!!」

「シンゴ……／＼／＼」

コイツがアカデミアへ抱く憎しみは当然のものだとも思う

……だがそれで関係のないこの次元の人間を巻き込むのコイツには嫌悪感を抱いてしまう

「そうよ！私は貴方の言う瑠璃じゃない！いい加減話を聞いて！」

「そうだな。貴様の解釈でリンを連れて行かせはしない！」

……これでわかってくれるなら……俺の怒りも収まるんだが……

「なっ……！貴様、瑠璃を攫っただけでなく……洗脳までするとは……!!許せん！やはりアカデミアは、貴様らは一人残らず殲滅してやる！デュエルだ！」

「……いいぜ。おまえは……俺の心を滾らせた!!」

俺はいつものデッキが入ったケースをポケットにしまい、サブデッ

キケースのあのデッキをセットする

「デュエル!!」

沢渡シンゴLP4000手札5枚

VS

黒咲隼LP4000手札5枚

「俺のターン！俺は手札からRRRバニシング・レイニアスを召喚！」

RRRバニシング・レイニアスATK1300

「バニシング・レイニアスの効果発動！召喚に成功したターンのメイ
ンフェイズにレベル4以下のRRモンスターを特殊召喚できる。R
Rトリビュート・レイニアスを特殊召喚！更にこのRRRファ
ジー・レイニアスは自分フィールドにファジー・レイニアス以外のR
Rが存在する時、特殊召喚できる！来い！ファジー・レイニアス！」

RRRトリビュート・レイニアスATK1800

RRRファジー・レイニアスDEF1500

「俺はレベル4のバニシング・レイニアスとファジー・レイニアスで
オーバーレイ！冥府の猛禽よ、闇の眼力で真実を暴き、鋭き鉤爪で栄
光をもぎ取れ！エクシーズ召喚！飛来せよ！ランク4！RRR
フォース・ストリクス！」

RRRフォース・ストリクスDEF2000

「フォース・ストリクスの効果！ORUを一つ使い、デッキからレベル
4・闇属性・鳥獣族モンスターを手札に加える。俺はORUとなった
ファジー・レイニアスを墓地に送りッ……!?どうした！何故効果が発
動しない！」

「その効果にチェーンして手札のエフェクト・ヴェーラーの効果が発
動した。フォース・ストリクスの効果はターン終了時まで無効だ」

「クツ……！ならば俺はトリビュート・レイニアスの効果でデッキか
らRRRミミクリー・レイニアスを墓地に送る！更に墓地に送ったミ
ミクリー・レイニアスを除外してデッキからRRRレイネスを手札
に加える。更にRRRネストを発動！RRRペイン・レイニアスを手
札に加える！トリビュート・レイニアスを対象にしてRRRペイン・レ
イニアスを特殊召喚！ペイン・レイニアスのレベルは対象モンスター

と同じになる。そして対象にしたトリビュート・レイニアスの守備力400のダメージを受ける」

RRペイン・レイニアスDEF100

黒咲隼LP4000↓3600

「そしてレベル4のトリビュート・レイニアスとレベル4となったペイン・レイニアスでオーバーレイ！再び現れる！RRフォーオース・ストリクス！フォーオース・ストリクスの攻撃力、守備力は自分の場の他の鳥獣族1体につき500ポイントアップする。そしてフォーオース・ストリクスの効果発動！ORUを一つ使い、デッキからブースター・ストリクスを手札に加える。更に魔法カードエクシーズ・ギフトを発動！フォーオース・ストリクスのORUを一つずつ取り除いてデッキから2枚ドロロー！更に墓地に送られたファジー・レイニアスの効果！デッキから同名カードを手札に加える！カードを2枚伏せてターンエンドだ」
RRフォーオース・ストリクスDEF2500

黒咲の場に並ぶのは2体の機械仕掛けの鳥と2枚の伏せカード。おそろくどちらかがレディネスだろう

「俺のターン、ドロロー。手札1枚を墓地に送り、魔法カードペンデュラム・キヤステイングを発動。デッキから名前が異なる魔界劇団Pモンスターを2枚手札に加える。俺は魔界劇団ワイルド・ホープと魔界劇団ビッグ・スターを手札に加える」

「ペンデュラム……？」

聞きなれない単語に眉を顰める黒咲

「更にコストで墓地に送ったE・HEROシャドーミストの効果発動。デッキからE・HEROアダスター・ゴールドを手札に加える。そして手札に加えたアダスター・ゴールドを墓地に送って効果発動。デッキからダーク・コーリングを手札に加える。更に手札から魔界台本舞台準備を発動。手札のビッグスターを表側表示でエクストラデッキに送り、デッキから2枚ドロローする。2枚ドロロー」

「エクストラデッキにメインデッキのカードを送るだ……!?!」

「E・HEROソリッドマン召喚」

E・HEROソリッドマン ATK1300

「更にソリッドマンの召喚時成功時、手札からレベル4以下のHERROを特殊召喚できる。V・HERROヴァイオンを特殊召喚」

V・HERROヴァイオンATK1000

「ヴァイオンが召喚、特殊召喚された時、デツキのHERROを1体、墓地に送ることができる。デツキからE・HERROエアーマンを墓地に送る。そしてヴァイオンの効果。墓地のシャドー・ミストを除外してデツキから融合を手札に加える」

「融合……!!やはり貴様らは……!!」

黒咲が俺が手にした融合のカードを鬼の形相で睨んでくる。

半分諦めの気持ちだが一応言っておく

「……だから俺はアカデミアじゃないしこの世界にも融合はあるんだって……」

「黙れ!!やはり貴様はアカデミアの手先だったな!!貴様を倒し、瑠璃は必ず返してもらおう!!」

「少しは人の話を聞けよ……!!人違いだって何度も言ってるだろ!!ああ、アツタマきた!!意地でもその分からず屋な考えを叩き直してやるぜ!俺は手札に加えた融合を発動!ヴァイオンとソリッドマンで融合!闇の力を宿し英雄よ、大地の英雄と一つになりて暁を照らす光となれ!融合召喚!現れる!E・HERROサンライザー!」

E・HERROサンライザーATK2500

「サンライザーの融合召喚時の効果!更にチェーンしてソリッドマンの効果発動!まずはソリッドマンの効果で墓地からレベル4以下のHERROを守備表示で特殊召喚する。来いエアーマン!そしてサンライザーの効果!融合召喚成功時、デツキからミラクル・フュージョンを手札に加えるぜ!」

E・HERROエアーマンDEF1300

「そしてエアーマンの効果!召喚、特殊召喚された時デツキからHERROモンスター1枚を手札に加える。俺はE・HERROリキッドマンを手札に加える!更にサンライザーの効果!自分フィールドのモンスターは自分フィールド上の属性一つにつき200ポイントアップする!」

E・HEROサンライザーATK2900

「墓地の魔界台本舞台準備の効果発動！墓地から除外することでデッキから魔界台本を3枚、相手に見せ、相手が選んだ1枚を手札に加える。選ぶのは3枚の魔界台本即興演劇だ！」

「ッ!!……右のカードだ」

「そして！手札に加えた魔界台本即興演劇を発動！デッキの魔界台本を墓地に送ることでデッキから魔界劇団Pモンスターを1枚、手札に加える。デッキから魔界台本オープンングセレモニーを墓地に送って魔界劇団ーコミック・リリーフを手札に！そして俺は！スケール2の魔界劇団ーワイルド・ホープと！スケール8の魔界劇団ーコミック・リリーフで！Pスケールをセッティング！」

俺がペンデュラムカードをセットすると青い柱が現れてその中に役者が入る

「な……なんだこれは……!?!」

「ペンデュラムゾーンに魔界劇団モンスターがいる時、墓地の魔界台本即興演劇の効果を発動できる！このカードを除外することでエクストラデッキの表側表示の魔界劇団Pモンスターを特殊召喚する！現れるビッグ・スター！」

魔界劇団ビッグ・スターATK2500

「ビッグ・スターの効果！1ターンに1度、デッキから永続魔法魔界台本魔界の宴タ目をセット！そして発動！ビッグ・スターをリリースして墓地のオープンング・セレモニーをセットする！ビッグ・スターは居なくなつたがこれで舞台準備のデメリットは消えたぜ。そして行くぜ！ペンデュラム召喚！今セッティングされているスケールは2と8！よってレベル3から7のモンスターが同時に召喚可能！現れる！俺様のオールキヤストたちよ！エクストラデッキからビッグ・スター！そして手札からE・HEROリキッドマン！光帝クライス！」

「な……!?!」一気にモンスターを3体も召喚しただと……!?!」

「こんなんで驚いてもらっちゃ困るぜ。クライスの効果発動！フィールドのカード2枚まで破壊する！破壊するのはクライス自身とPゾーンのワイルド・ホープだ！そして破壊した数だけドロウする！2

枚ドロロー！更に破壊されたワイルド・ホープの効果！デツキからワイルド・ホープ以外の魔界劇団モンスターを手札に加える！2枚目の魔界劇団ービッグ・スターを手札に！」

沢渡シンゴLP4000手札6枚（1枚はミラクル・フュージョン、1枚はダーク・コーリング、1枚は魔界劇団ビッグ・スター

「更にビッグ・スターの効果発動！デツキから魔界台本魔王の降臨をセットする！そして魔法カードミラクル・フュージョンを発動！リキッドマンとエアーマンを除外融合！大空を司る英雄よ、水を支配し英雄と一つになりて、絶対零度の暴風となれ！現れる！E・HEROアブソルトZero！」

E・HEROアブソルトZero ATK2900

「更に融合素材として除外されたりキッドマンの効果！デツキから2枚ドロローして1枚捨てる！ビッグ・スターを墓地に！そしてダーク・コーリングを発動！墓地のアグスター・ゴールドとビッグ・スターを除外して融合！悪魔の役者よ、仮初の英雄と一つになりて、世界に絶望を示せ！来い！E・HEROマリシャス・ベイン！」

E・HEROマリシャス・ベインATK3600

「すげー……」

目の前の光景を見て私はそう言わずにはいられなかった。隣のリンも同じ気持ちらしい。目がキラキラしている。なにも知らなかった私だがアイツのおかげで人の表情の違いもわかるようになってきた

……アイツのキメ顔がウザかったおかげで……

でもまあアイツには感謝しているし、アイツは凄いなと思う

アイツはいつも私たちの想像を超えるものを見せてくれるが今回はいつも以上に驚愕している

私も融合召喚を使用しているだけにその強さがわかってしまう

アイツは……強い。アカデミアでも勝てる者などいないと思わされてしまうぐらいに

それだけ強く、デュエリストとしての誇りも誰よりも高いのに、皆を、挙げ句の果てには敵さえも楽しませようとするようなある意味ふざけた奴だ

でもだからだろうか……私が……アイツに夢中になっているのは……胸がドキドキするのは……

「カッコいい……」

隣のセレナも多分私と同じ気持ちらしい。夢中になっている

思わず本音が漏れてしまったが、幸いシンゴはデュエルに夢中で聞こえてなかったようだ。

でも本当に凛々しくて、クールに見える……

……普段はドジなのに……

でもいつものシンゴも大好き……

この気持ちに気づいたのはさっきだった

正直私はシンゴに迷惑をかけているんじゃないかと思った。あの時、アカデミアに対して苦悩を抱いている彼を見ると。自分の存在がシンゴに不幸を招くのではと

そう思った時、イメージしてしまった

自分のせいでシンゴが苦しむ姿を

その途端に怖くなった。大切な人が自分のせいで傷ついてしまうのが

だがなによりも怖かったのは……

シンゴが私を捨ててしまう可能性だった

それを考えてしまった時、私はこれ以上ないぐらいの恐怖が頭をよぎった

だからシンゴに聞こうと思った。答えられるのも怖かったがこの苦しみから逃れたかった。

そう思った矢先に不審者に遮られた

そして勘違いの末に連れて行かれそうになった時、これ以上のない恐怖が私を襲った。

動けない私に伸ばされる手

絶望しかけたその時……

……彼がまた私を助けてくれた。

そしてシンゴが私のために怒ったくれたのを見て思わず涙が出てしまった。

その時、私の心のピースが埋まったような気がした

……ああそうか、なにをそんなに恐れていたんだ

彼は太陽のよりも明るく……

月の光のように優しく……

星よりも綺麗に輝いていたじゃないか

だから信じよう。彼のことを。

……勝手な思い込みなのはわかっている。いつか彼が迷惑と感じるかもしれない。最悪の結果になる可能性があるのもわかっている。だからいつか……真正面から彼と話そう。そして伝えよう。私の気持ち……

沢渡シンゴLP4000手札5枚

E・HEROサンライザーATK3100

E・HEROアブソルートZero ATK3100

EーHEROマリシャス・ベインATK3600

魔界劇団ビッグ・スターATK2500

V S

黒咲隼LP3600手札2枚

RRフォース・ストリクスDEF2500

RRフォース・ストリクスDEF2500

「手札1枚をコストにして、除外されているビッグ・スターを対象に装備魔法D・D・Rを発動！ビッグ・スターを特殊召喚！更にセットカードオープン！魔王の降臨！俺の場の魔界劇団の数まで、つまり2枚お前のカードを破壊する！フォース・ストリクスを破壊だ！」

フィールドに現れた台本を読んだビッグ・スターが纏った黒いオーラをフォース・ストリクスたちにぶつけると2体の鳥は無残にも爆発した

「クツ……これで倒されるほど俺たちの意志は脆くはない！速攻魔法RUMラプターズ・フォースを発動！このターン破壊されたフォース・ストリクスを特殊召喚し、一つランクが上のRRにランクアップする！凜猛なる隼よ。激戦を切り抜けしその翼翻し寄せ来る敵を打ち破れ！ランクアップ！エクシースチェンジ！現れろお！ランク5！RRブレイズ・ファルコン！更にRRレディネスを発動！このターン、俺の場のRRは戦闘で破壊されない！更に墓地のこのカードを除外してこのターン俺が受けるダメージを0にする！」

「ならこうだ！俺はカードを2枚伏せる！そして2体目のビッグ・スターの効果でデッキから2枚目の魔王の降臨をセットして発動！破壊するのはお前のネスト！更に魔界の宴々目の効果でD・D・Rで出したビッグ・スターをリリースして、魔王の降臨を再びセットする！更に俺は手札から死者蘇生を発動！墓地の魔界劇団1コミック・リリースを蘇生させる！」

「いつの間に……そうかあの時！」

「イエス！D・D・Rのコストで墓地に送っておいたのさ！そしてコミック・リリースのP効果！お前のブレイズ・ファルコンと俺のコミック・リリースのコントロールを入れ替える！」

「なんだと!?!」

「そしてペンデュラムゾーンのこのカードを破壊する。だが『コミッ

ク・リリーフ』はコントロールが移った時、元々の持ち主は自身の場にセットされた『魔界台本』魔法カードを破壊できる。セットされた『オープンング・セレモニー』を破壊。『オープンング・セレモニー』は相手のカード効果でこのカードが破壊され、エクストラデッキに表側表示の魔界劇団Pモンスターが存在するなら手札が5枚になるようにドローする。俺の手札は0。よって5枚ドローだ！」

沢渡シンゴLP4000手札0↓5枚

「そして再びセットオープン！魔王の降臨！ブレイズファルコンを破壊する！」

「貴様……!!」

自分のカードを奪われた挙句、自壊されたのがよっぽど嫌だったのか青筋を浮かべて睨んでくる

「俺はカードを2枚伏せてターンエンド。この瞬間、ビッグ・スターの効果でセットされた魔界の宴タ目は破壊される。そしておまえのスタンバイフェイズにコミック・リリーフは俺のフィールドに戻る」

「俺は……俺は負けるわけにはいかないんだああ!!俺のターンドロ―お!!俺は貪欲な壺を発動!バニシング・レイニアス、ペイン・レイニアス、ブレイズ・ファルコン、フォース・ストリクス2体をデッキ、エクストラデッキに戻してシャッフル!そして2枚ドロー!バニシング・レイニアスを召喚!効果でバニシング・レイニアスを特殊召喚!更にファジー・レイニアスを特殊召喚!」

黒咲のフィールドに3体のRRが並んだ。そろそろ出るな

「俺はレベル4のバニシング・レイニアスとブースター・ストリクス、ペイン・レイニアスでオーバーレイ!雌伏の隼よ、逆境の中で研ぎ澄まされし爪を上げ、反逆の翼翻せ!エクシーズ召喚!現れるおお!!RRライズ・ファルコン!」

凄まじい気迫とともに呼び出されたのは反逆の隼

「RRライズ・ファルコンの効果発動!ORUを一つ取り除くことで相手の特殊召喚されたモンスター1体の攻撃力を自らの攻撃力に加える!マリシヤス・ペインを対象にしてその攻撃力を加える!これで「あ、緊急脱出装置発動」なっ……!」

ソイツが一番面倒なのに黙って見てるわけないじゃん

「RRーライズ・ファルコンを手札に戻す」

「グッ……！俺はカードを1枚伏せてターン「エンドフェイズ時にマスク・チェンジ、更に手札1枚をコストにマスク・チェンジ・セカンド発動。E・HEROアブソルトZeroとコミック・リリースで変身召喚。来いM・HEROダーク・ロウ、M・HEROアシッド。M・HEROアシッドの特殊召喚時効果。相手の魔法、罠ゾーンのカードを全て破壊する。そして、ダーク・ロウがいる時、お前の墓地に送られるカードは除外される。ダーク・アシッド・ハイドロ」貴様アア!!」紫の濁流によってセットしてあった『レディネス』は溶けて消滅した。

さつきから黒咲が物凄い形相で睨んでくるが知らんよ。妨害は基本戦術じゃん。てゆうか顔がヤバイヤバイ。リンとセレナも引いてるし……

「俺のターンドロー」

自信の場が丸腰にも関わらず黒咲はまだ戦意を失っていないようでこちらに憎悪の視線を向けてくる。

「その意志の強さだけは認めてやるよ。全モンスターで一斉攻撃だ。やれ！」

「クッ！グワアアアアア!!瑠璃い……」

ビッグ・スターとヒーローたちの一斉攻撃を受けた黒咲は5mは吹っ飛んでいった。やっぱリアルソリッドビジョンが内臓されていたのかりアルダメージを受けた黒咲は完全に気絶していた

「だ、大丈夫……?」

「……流石にやり過ぎではないか?」

リンとセレナからジト目を向けられた。

「あー……悪い、やり過ぎた」

我ながらあんなに怒りを見せたのは初めてだな。やりすぎないよ
うに気を付けなくては

一応安否は確認したが特に問題はないっぽいので

「ま、まあ大丈夫っぽいし帰る「待て！」ツ!?今度はなんだ!」

その場に響くのは怒りの籠った声。

声の主を探していると気配を感じたので後ろに下がる。その後、建物の上からゴースルとマフラーで顔が隠された不審者が現れた。「瑠璃は返してもらおうぞーアカデミアーそして隼の仇はとらせてもらう！」

……帰っていい？

V S 不審者2

あ、ありのままに起こったことをRPG風で話すぜ！

不審者1に絡まれた！↓不審者1の正体は黒咲だった！↓リンとセレナを瑠璃と間違われた！↓黒咲がキレた！↓黒咲がリンを連れていこうとした！↓俺がキレた！↓黒咲とデュエルになった！↓勿論俺様が勝利した！↓不審者2が現れた！

ってなんでこんな面倒ごとに巻き込まれるのか自分でもわからない

黒咲の後に現れたこの不審者2は間違いなくアイツだ

「おいおい……だからその奴にも言ったがコイツらは瑠璃じゃない。人違いだし俺たちはアカデミアじゃない」

多分コイツは少なくとも黒咲よりは話を聞いてくれるから大丈夫だと思うが……

「……確かによく見てみれば髪の色や目の色など違うな……それに二人いるということは仮にどっちかが瑠璃にしろもう一人は瑠璃じゃないということか……」

……ああ、話を聞いてくれる奴で助かったよ

「だがアカデミアである貴様を見逃すわけにはいかない！隼の仇は取らせてもらう！デュエルだ！」

……前言撤回。全然話を聞いちゃいなかった

「……だから俺たちはアカデミアじゃないし、こいつと戦ったのはそいつが話を聞かなかったからだ」

「さっきのデュエルであればどの融合召喚を見せたくせにそんな言い逃れができると？」

……融合デツキを使ったのは失敗だったか。今度からはデツキ選択は慎重にしよう……

……さて、どうしたものか

はつきり言っただけこの場から去りたいのだが逃がしてくれそうにな
い『シユーン！』なんだ!?

「これはデュエルアンカー。このアンカーはデュエルが終わるまで決

して外れることはない。さあデュエルだ！」

……やるしかないか。今度は間違われないように、つて今更遅いか
もしれないがデッキを変える

「デュエル!!」

沢渡シンゴLP4000手札5枚

VS

不審者2LP4000手札5枚

……

シンゴとまた現れた不審者がデュエルディスクを構える。先行は
シンゴか

「俺はPゾーンにメロー・マドンナとワイルド・ホープをセツティン
グ」

「ペンデュラム……貴様らアカデミアはそんなものまで開発したのか
?」

その目から向けられるのは偽りなどない強い敵意。それだけでわ
かってしまう……

アカデミアへの憎しみや怒りが……

「だから違うって言ってるだろ……メローマドンナのペンデュラム効
果。ライフ1000をコストにデッキからビッグ・スターを手札に加
えるぜ。そして揺れる眼差しを発動。メローマドンナとワイルド
ホープを破壊。揺れる眼差しの効果。更にチェーンしてワイルド
ホープの効果。デッキからコミック・リリーフを手札に加える。揺れ
る眼差しの効果はペンデュラムゾーンの破壊した数まで効果を発動
できる。1つ目の効果、相手に500のダメージを与える」

沢渡シンゴLP4000↓3000

不審者2LP4000↓3500

「ぐうッ……!」

ダメージを受けても尚、怯むことなく立ち上がりシンゴを睨みつけ
る。

そこまで憎いのか……アカデミアが……

「2つ目の効果、デッキから2枚目のビッグ・スターを手札に加える。

そしてビッグ・スターとコミック・リリースでペンデュラムスケールを再びセツティング！これでレベル4から7までのモンスターが同時に召喚可能！行くぜ行くぜ行くぜえ！ペンデュラム召喚！現れる！エクストラデツキからメロー・マドンナにワイルドホープ！そして手札からビッグ・スター！」

光のアークから現れるのはデュエルを盛り上げるために呼び出された魔界の役者たち。

魔界劇団ビッグ・スター ATK 2500

魔界劇団ワイルド・ホープ ATK 1600

魔界劇団メロー・マドンナ DEF 2500

「そしてビッグ・スターの効果！デツキからオープニング・セレモニーをセットして発動！ライフを1500回復！」

ビッグ・スターがサツと腕を振ると鮮やかな光のアークが空中に描かれ、舞台を盛り上げるための花火が打ち上げられる。モンスターたちも格好つけてポーズを決めていた。

ていうかなんでアイツも両手を広げて格好つけているんだ……見たるコッチが恥ずかしい……

沢渡シンゴ LP 3000 ↓ 4500

「巫山戯ているのか貴様！」

「いや？俺は大マジメだぜ？折角のデュエルなんだし楽しもうじゃねえか。更にメロー・マドンナの効果！デツキからレベル4以下の魔界劇団を特殊召喚できる！来な！ティンクル・リトルスター！」

魔界劇団ティンクル・リトルスター 「ふあ……」

DEF 1000

メロー・マドンナが透き通った声で歌うとビッグ・スターと同じ帽子を被った少女人形は寝惚け眼を擦りながらフィールドに降り立った

「そしてティンクル・リトルスターをリリースして光帝クライスをアドバンス召喚！」

光帝クライス 「はあっ！」

ATK 2400

煌びやかな衣装を纏った帝が光を放つ

上手い。これでメロー・マドンナのエンドフェイズに手札に戻すというデメリットはなくなったか

「クライスの効果！クライスとメロー・マドンナを破壊！2枚ドロ―だ！」

フィールドやエクストラデッキに展開しながらも手札を3枚まで回復させる。流石だな

「まだまだ行くぜ！ビッグ・スターのP効果！ビッグ・スターをリリースして墓地のオープンング・セレモニーを手札に加えるぜ。カードを4枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターンドロ―！手札1枚をコストにツインスターを発動！お前のペンデュラムカードを破壊する！」

二つの竜巻がシンゴの伏せカードを破壊せんと猛威を振るう。アイツペンデュラムカードが魔法カードだということを見抜いたのか！?

「それにチェーンしてカウンター罠、神の宣告発動！ライフを半分支払い発動を無効にし破壊する！」

だが天をも支配する神の威光の前に二つの嵐は霧散した。

沢渡シンゴLP4500↓2250

「だかコストは無効にはならない！墓地に送られた幻影騎士団ダステイローブを除外してデッキから幻影騎士団サイレントブーツを手札に加える！幻影騎士団ラギッドグローブを召喚！」

幻影騎士団ラギッドグローブ ATK1000

奴の場に現れたのはボロボロの外套を纏った闇の騎士

「更に俺の場に幻影騎士団が存在する時手札の幻影騎士団サイレントブーツは特殊召喚できる。来い！幻影騎士団サイレントブーツ！」

先ほどダステイローブの効果で手札に加えられたボロボロのマントを羽織った騎士が現れる

「俺はレベル3のラギッドグローブとサイレントブーツでオーバーレイネットワークを構築！」

二体の闇の騎士が紫の光となり渦巻くエネルギーの中に飛び込む

「戦場に倒れし騎士たちの魂よ。今こそ蘇り、闇を斬り裂く光となれ！エクシース召喚！現れる！ランク3！ファンタムナイト幻影騎士団ブレイクソード！」

先端が折れた大剣を担いだ漆黒の騎士が光の中から飛び出してフィールドに降り立つと凄まじい衝撃が伝わってくる

ファンタムナイト幻影騎士団ブレイクソード ATK3000

「ブレイクソードの効果！ORUを使い、俺の場のカード1枚と貴様のカード1枚を破壊する！俺はブレイクソードと貴様の伏せカードを破壊「おつと待ってもらおうか！それにチェーンしてトラップカードオープン。メタバース！更にチェーンして永続罠ペンデュラム・スイッチ発動！」なにつ!？」

ブレイクソードの効果が発動する前に発動された2つのカード。

「まずはペンデュラム・スイッチを発動。だが発動効果は特にならない。本命はこつちだ！メタバースの効果でデッキからフィールド魔法をセットする！俺は魔界劇場ファンタステイクシアターをセットする！そしてブレイクソードの効果だが……ファンタステイクシアターが場に存在し、俺の場にP召喚された魔界劇団が存在する時、1ターンに1度だけお前のモンスター効果を「俺の魔法、罠ゾーンのセットカードを破壊する」に書き換えられる！」

「なんだとつ!？」

「よってブレイクソードの破壊効果は無効となり俺のセットカードは破壊される！更に破壊されたオープンング・セレモニーの効果！セットされたこのカードが相手のカード効果によって破壊された時、エクストラデッキに表側表示の魔界劇団Pモンスターが存在するならば札が5枚になるようにドローする。俺の手札は0、よって5枚ドローだ！」

ブレイクソードがシンゴのカードを破壊せんと駆けるが、フィールドに突然現れた魔界の力に誘導され、間違えた対象を破壊してしまい、破壊されたオープンング・セレモニーの恩恵を受けたシンゴの手札が一気に回復する

「クツ……バトルだ！俺はブレイクソードでワイルド・ホープを攻

撃！」

ブレイクソードの振るった大剣に手にした銃で抵抗していたワールド・ホープが一刀両断されるとリアルダメージと化した衝撃波がシンゴを襲う。

「グワアアアア!!」

「シンゴ!!」

やめろ……!!シンゴを傷つけるな!

沢渡シンゴLP2250↓850

「グッ……破壊されたワイルド・ホープの効果でデッキからデビル・ヒールを手札に……更にペンデュラム・スイッチの効果……Pゾーンの魔界劇団ビッグ・スターを特殊召喚……」

「俺は強欲で貪欲な壺を発動!デッキの上から10枚を裏側表示で除外して2枚ドロウする!カードを4枚伏せてターンエンドだ」

魔界劇団ビッグ・スターATK2500

ブレイクソードの攻撃の影響を受けたシンゴはボロボロになり、立ち上がるのも限界に近かった

「もう見てられない……!」

リンは両手で目を覆って下を向く。私も目の前の光景がどうしようもなく苦しい。

それでもシンゴは尚、デュエルを続けようと立とうとする。何故だ!?何故そこまでして戦おうとするのだ!?

前の私ならそれを勇気の証だと思っていただろう。デュエリストなら傷ついても戦うのが当然だと自分の考えを押し付けていただろう。

でも……

『確かにセレナの言う通り勝敗という概念がある以上、デュエルとは戦いと見られるのかもしれない』

私は……

『でも誰だって傷つくのが怖いんだ。死ぬのが怖いんだ。大切な人を失うのが怖いんだ』

私は『それは弱い人間だからではないか?』って聞いた。その時の

私はアイツが強い人間だと思っていたからだ
するとアイツは苦笑した。

『そうかもな。でも俺だって怖いさ。傷つきたくないし、死にたくもない。でも情けないって思われてもいい。弱さがあるのは誇らしいと思えるからかな』

『弱さがか？何故だ？』

『痛みや怖さがあると俺を人として生きている……って思えるんだ。誰かを傷つけるのにも戸惑えるし、死なないためにダサくもなれるし、大切な人を失わないためにどこまでだってみつともなくなれる。弱いだろ？情けないだろ？でも俺はそんな自分でよかったと思えるんだ』

あの時清々しい笑顔で言ったシンゴの言葉を私は理解できなかった。そんな人間が真つ先に死ぬのだとしか思っていなかったからだ。だけど……今ならわかる！

アイツが傷ついていくのがどうしようもなく苦しい！

傷ついていくアイツをこれ以上戦わせたくない！

アイツを失うのがどうしようもなく嫌だ！

そう思った時、私の身体は勝手に動いていた。シンゴを守るように私は不審者の前に立つ

「やめろー！！こんなのデュエルじゃない！！デュエルは……！」

アイツのいう本当のデュエルは……！

「デュエルは……！戦いだとしても……！皆を……！誰もを笑顔にする……！誰かの希望になれるような……！そんな明るいものなんだ！決して……戦争や争いの道具なんかじゃない！」

「ツ!! (瑠璃……)」

「セレ……ナ……」

「何故だ……何故私に本当の強さを教えてくれたお前が……！ここま
で……！」

「言っただろ……？俺は……大切な誰かのために……どこまでもみつともなく……なれるって……お前らは……かけがえのない存在なんだ……」

「シンゴ……！わかった！わかったから！もうやめてくれ！後は私が……！」

「これ以上シンゴを戦わせはしない！私が守る！」

「はあ……あいにく、俺はまだ……負けてない！」

「シンゴ!?何故……！」

「……言っておくが俺はどうしようもないぐらい……聞き分けが悪いんでな！」

……

「フツ、そうか……わかった。好きにしろ」

「セレナ!？」

「た・だ・し！絶対に死ぬな！それが条件だ」

「リョー……カイ」

「……さて再開だ。俺のターン」一つ聞きたい「……なんだ？」

「……何故、お前はそこまでして戦おうとする？」

「あ……？決まってるだろ。大切な人を失いたくないから。それ以外に理由がいるか？」

「……そうか、アカデミアにもお前のような奴がいるとはな」

「……だから違うっての。ドロー。俺はスケール1のデビル・ヒールをペンデュラムゾーンにセットイング！これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！その前にデビル・ヒールのペンデュラム効果！ビッグ・スターをリリースしてブレイク・ソードの攻撃力をビッグ・スターの攻撃力分ダウンさせ「させるか！永続罠、王宮の勅命を発動！これで魔法カードの効果は全て無効だ！」なにい!？」

魔法カードの無効化だ?!マズイな……

「ならこうだ！ペンデュラム召喚！来い！俺様のオールキャストたちよ！エクストラデッキからビッグ・スター！ワールド・ホープ！ティンクル・リトルスター！」

再び描かれる光のアークから現れるのはいつもシンゴのデュエルを支えてくれる仲間たち

魔界劇団ビッグ・スターATK2500

魔界劇団ワールド・ホープATK1600

魔界劇団ティンクル・リトルスター ATK1000

「そしてペンデュラム・スイッチの効果でデビル・ヒールをPゾーンから特殊召喚！召喚時効果発動！ブレイクソードの攻撃力を俺の場の魔界劇団の数×1000ダウン！」

魔界劇団デビル・ヒール ATK3000

幻影騎士団ブレイクソード ATK3000↓0

悪魔の巨人が腕を振ると魔法を受けたブレイクソードは膝をつく

「ワイルド・ホープの効果発動！俺の場の魔界劇団の数×100ポイント攻撃力をアップする！そしてバトルだ！デビル・ヒールでブレイクソードを攻撃！」

魔界劇団ワイルド・ホープ ATK1600↓2100

ブレイクソードは僅かながらの抵抗も虚しくその巨腕に握り潰される

不審者2LP3500↓500

「ぐわあああああ!!」

ブレイクソードが破壊されると衝撃波が奴のゴーグルとマフラーを飛ばされた

奴の顔が明らかに……

「「「遊矢／ユーゴ／ユーリ!!」」」

私たちの下に晒された奴の顔はユーリや遊矢、そして前にリンに見せてもらった幼馴染のユーゴと瓜二つだった

「誰だそいつらは？俺はユートだ」

ユート……恐らくユートは……

「それよりも君たちは俺に似た奴を知っているのか……？」

「ああ、お前に似た奴が4つの次元にそれぞれ存在する」

「……なぜおまえはそこまで知っているんだ？やはり……」だから違うって言うてるだろ！少々訳ありなんだよ！話なら後でいくらでも聞いてやる！……本当か？「ああ！」ならデュエルの続きだ。破壊されたブレイクソードの効果！墓地から幻影騎士団ラギッドグロブと幻影騎士団サイレントブーツをレベルを1つ上げて特殊召喚する！」

ファントムナイト
幻影騎士団ラギッドグローブDEF500

ファントムナイト
幻影騎士団サイレントブーツDEF1200

ファントムナイト
「幻影騎士団は倒れない！何度打ち倒されようが蘇る！」

「ならビッグ・スターでサイレントブーツを攻撃！」

ビッグ・スターの魔法を前にサイレントブーツは抵抗する間も無く破壊された

「ティンクル・リトルスターでラギッドグローブを攻撃！」

リトルスターが突進するとラギッドグローブはそのまま破壊された

「二体目のビッグ・スターでダイレクトアタックだ！」

「ッ！させるか！幻影騎士団ウロング・マグネリングを発動！攻撃を無効にし、その後、コイツはモンスターとして召喚できる！」

ファントムナイト
幻影騎士団ウロング・マグネリングDEF0

ビッグ・スターの魔法がユートに放たれるが出現した磁石の力によって防がれる。

「……ならティンクル・リトルスターでウロング・マグネリングを攻撃だ！」

「なんだと!?そのモンスターの攻撃は終わった筈だ！」

「ティンクル・リトルスターは一度のバトルフェイズに相手モンスターに3度まで攻撃できる！行け！」

……だがリトルスターの再突進で磁石は破壊された

「ワイルド・ホープでダイレクトアタックだ！」

ファントムナイト
「クッ！幻影騎士団ウロング・マグネリング発動！攻撃を無効にしてモンスターとして特殊召喚！」

ファントムナイト
幻影騎士団ウロング・マグネリングDEF0

「ティンクル・リトルスターでウロング・マグネリングを攻撃！」

ワイルド・ホープの銃撃は止められたがティンクル・リトルスターの突進によってウロング・マグネリングはまたもや破壊された

「メインフェイズ2に入る。俺はレベル7のビッグ・スター二体でオーバーレイ！」

「なんだとっ!!？」

ビッグ・スターが足元に現れた渦の中に飛び込むとその中から光のエネルギーが溢れ出す

「黒き古の力を受け継ぎし竜よ。聖なる炎とともに舞い降りろ！エクシーズ召喚！」

レッドアイズ・フレアメタルドラゴン
現れる！真紅眼の鋼炎竜！」

現れたのは何度も私を敗北に誘った紅き眼を持つ黒竜

「レッドアイズだど!?そのカードはエクシーズ次元でも持っている者は少ないレアカード……！何故お前が持っている!?!」

やはりあのカードは相当な価値のカードか……効果がレッドアイズデッキでなくても強力すぎるからな……でもシンゴってそんなこと関係なしにカードを沢山持っているんだよな……

「俺はカードを3枚伏せてターンを「エンドフェイズ時に非常食を発動!このカードは発動時にカードをコストにする効果、よって王宮の勅命を墓地に送ること

で効果を発動できる!王宮の勅命を墓地に送ってライフを1000回復ツグワアアア!!」終了する」

ライフを回復したもののレッドアイズの炎がユートの残り少ないライフを削る

ユートLP500↓1500↓1000

「ッ!俺のターン、ドロオオ!俺は魔法カード一時休戦を発動!このカードの効果で次の相手ターンのエンドフェイズまでお互いが受けるダメージを0にしてお互いに1枚ドロする!ドロした命削りの宝札を発動!このターンの特殊召喚を封じて、エンドフェイズに手札を全て捨てるがデッキから3枚ドロできる! 3枚ドロ!更に俺は墓地のラギッド・グローブを除外してデッキから幻影騎士団シャドー・ベイルを墓地に送る!まだだ!墓地のサイレントブーツを除外してデッキから幻影霧剣を手札に!カードを4枚伏せてターンエンドだ!」

一時休戦を使われたか……

「俺のターンドロ。ペンデュラムスイッチの効果でワイルド・ホープをPゾーンに移動!そしてダブル・サイクロンを発動!ペンデュラムスイッチとお前の右端の伏せカードを破壊する!」

2つの竜巻によりペンデュラムスイッチと伏せカードが破壊される。破壊されたのは幻ファンタムフォッグフレード影霧剣

「真紅眼の鋼炎竜をリリースしてクライスをアドバンス召喚！効果でクライスとティンクル・リトルスターを破壊！「させるか！クライスを対象に幻ファンタムフォッグフレード影霧剣発動！クライスの効果は無効だ！」シヨウの邪魔はさせないぜ！カウンター罠、魔球の賄賂！魔法、罠を無効にして相手に1枚ドロウさせる！「クツ……！」2枚ドロウ！更に揺れる眼差しを発動！ワイルド・ホープとコミック・リリーフを破壊して2枚目のメロー・マドンナを手札に！更にワイルド・ホープの効果でファンキー・コメディアンも手札に加える！」

沢渡シンゴ3↓5↓4↓6

「3枚も手札を増やしただと!?!」

「これで仕上げだ！神秘の中華鍋を発動！デビル・ヒールをリリースしてライフを3000回復う！」

沢渡シンゴLP850↓3850

デビル・ヒールがリリースされて灯された光によってシンゴの傷が癒えていく。

それにしても……手札を増やすばかりかライフの回復までするのは流石としかいえない

「ここからは俺様のステージだ！魔界劇団カーテンライザーをPゾーンにセッティング！カーテンライザーのP効果！自分フィールドにモンスターが存在しない時、特殊召喚できる。来い！カーテンライザー！」

魔界劇団カーテンライザー「ケケケ！」

ATK1100

「そしてカーテンライザーの効果！デッキから魔界台本を墓地に落とすことでエクストラデッキの表側表示の魔界劇団を手札に加えられる！俺はデッキから火竜の住処を墓地に落としてデビル・ヒールを手札に戻す！更に更にい！ファンタステイクシアターの効果！手札のデビル・ヒールとオーブニング・セレモニーを見せて、デッキから魔界の宴タ目を手札に！そして手札に戻したデビル・ヒールとサーチ

したファンキー・コメディアンでペンデュラムスケールをセットイング！」

何度も描かれる魔界のアーキは自然とアイツの場にモンスターが集まっていくように見える

「これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能！再び揺れる！ペンデュラム召喚！エクストラデツキから蘇れ！メローマドンナ！コミック・リリーフ！ティンクル・リトルスター！手札から2体目のメロー・マドンナ！魔界の宴タ目を発動！カーテン・ライザーをリリースしてオープンング・セレモニーをセット！更にメロー・マドンナの効果でデツキからワイルド・ホープを特殊召喚！オープンング・セレモニー発動！ライフを2500回復っ！」

魔界劇団メロー・マドンナ ATK1800

魔界劇団コミック・リリーフ ATK1000

魔界劇団メロー・マドンナ DEF2500

魔界劇団ティンクル・リトルスター ATK1000

魔界劇団ワイルド・ホープ ATK1600

沢渡シンゴ LP3850↓6350

遂にライフが初期値を上回った。ユートも流石にこの光景に驚愕を隠せない

「更にワイルド・ホープをリリースして魔界の宴タ目の効果発動！墓地の火竜の住処をセットする!!ティンクル・リトルスターを対象に発動！このターン、リトルスターが相手モンスターを破壊した時、相手のエクストラデツキのカードを3枚除外させる！」

「なに!？」

「そしてメロー・マドンナをリリースしてトラップカードオープン！ナイトメア・デーモンズ！お前の場にナイトメア・デーモン・トークンを3体特殊召喚！」

更にナイトメアデーモンズがユートの場に召喚された。ダメージは受けないが……

「お次はファンキー・コメディアンのP効果！もう一体のメロー・マドンナをリリースしてその攻撃力分、リトルスターの攻撃力をアップさ

せる！」

魔界劇団ティンクル・リトルスター ATK1000↓2800

「行くぜバトルだ！」「させるか！威圧する咆哮！このターンの攻撃を封じる！」カウンター罠、魔宮の賄賂！無効に！「なっ……！」ティンクル・リトルスターでナイトメアデーモントークン3体を攻撃！マジカルシューティングバースト、サンレンダア！」

リトルスターの乗っている星が光を放つとナイトメア・デーモン・トークンは破壊された。

ていうか技名ダサイな……

「さあ！破壊したカードは3枚！よって9枚のカードを除外してもらおうか！」

「おのれ……！」

ユートのエクストラデッキから9枚のカードが除外されていく。
ヴェルズ・ウロボロス2枚、インヴェルズ・ローチ2枚、ファンタムナイトカード・ジャベリン2枚、カングルゴーム2枚、交響魔人マエストローク1枚

「最後にティンクル・リトルスターをリリースして墓地の魔界台本オープニング・セレモニーをセットする！カードを1枚伏せてターンエンドだ」

「俺の……ターン!!ドロー……なら！2枚伏せて命削りの宝札を発動！3枚ドロー！1枚伏せて、サイクロンを発動！ファンタステイツクシアターを破壊！エンドフェイズにダスディローブを墓地に送る。ターンエンドだ」

ユートは……まだ諦めていないのか……!?

「俺のターンドロー……このスタンバイフェイズにコミック・リリースのコントロールはお前に移る！「なっ……!?!」そしてコミック・リリースのコントロールが相手に移った時、元々の持ち主は場のセットされた魔界台本を1枚破壊できる。オープニング・セレモニーの効果で3枚ドローだ！何度でも揺れる！ペンデュラム召喚！来い！ティンクル・リトルスター！そして二体のメロー・マドンナとワイルド・ホープ！そしてセットしてあったオープニング・セレモニーを発動！ライ

「フ2500回復う！」

魔界劇団メロー・マドンナDEF2500

魔界劇団メロー・マドンナDEF2500

魔界劇団ワールド・ホープATK1600

魔界劇団ワールド・ホープATK1600

魔界劇団ティンクル・リトルスターATK1000

沢渡シンゴLP6350↓8850

……ここまでライフが回復すると勝ち負け以前に凄いな

「レベル7のメロー・マドンナ2体でオーバーレイ！」

再び燃え上がれ！レッドアイズ・フレアメタルドラゴン真紅眼の鋼炎竜！

レッドアイズ・フレアメタルドラゴン真紅眼の鋼炎竜ATK2800

「2枚も持っているのか!？」

それについては私も驚愕を隠せなかった。この次元でも50万はするからな……

「まだまだあ！俺は手札のプリティ・ヒロインを通常召喚！」

魔界劇団プリティ・ヒロイン「キャハ☆！」

ATK1500

「俺はここで罨カードピケルの魔法陣を発動！このターン俺は効果ダメージを受けない！」

なるほど、レッドアイズの効果に対策したというわけか

「そう来たか……だったらファンキー・コメディアンのP効果！ティンクル・リトルスターをリリースしてプリティ・ヒロインの攻撃力に加える！そして火竜の住処をプリティ・ヒロインに発動！更にレベル4のワールド・ホープ2体でオーバーレイ！闇より来たれ！深淵に潜む者！そしてORUを使って効果発動！このターンお前は墓地からカード効果を発動できない！」

魔界劇団プリティ・ヒロイン→ATK1500↓2500

深淵に潜む者ATK1700

なるほど……墓地効果への対策か

「行くぜ！バトルだ！プリティ・ヒロインでコミック・リリーフを攻撃！」

「永続罨安全地帯！コミック・リリーフに耐性をつける！」

ステッキをチョイとぶつけたプリティ・ヒロインはコミック・リリーフは痛がるそぶりを見せないで涙目になる。それを見たコミック・リリーフは慌てて苦しむふりをして倒れる。なんだこれ？でも……

「ふ、フフフツ！アハハハハハハ！」

こんなどうしようもなくしよもないことが自然と笑えてくる。不思議だな……前の私なら「巫山戯るな」と返したはずなのに……

「フツ……！アハハハハハハハ！！」

ユートやシンゴもそれに釣られて笑い出す。

本当は私も弱かったんだな……いや、弱くなったというべきか。

でもむしろ誇りに思える。こんなにも幸せなのだから……

「フハハハハ……！！あー……！しよもないはずなのに笑えた……！でも楽しいだろ？デュエルは恐怖も与えられる。でも笑顔だつて与えられるんだ」

「ハハハツ……ああ……！（ああそうか。瑠璃……君がデュエルで笑顔と言った意味は……）」

ユートの眼はなにか吹っ切れたように見えた。シンゴが……アイツを笑顔にしたんだな……やっぱりスゴいな、アイツは

「だが勝ち譲らないぜ！（しかしコミック・リリーフの戦闘で発生する自分へのダメージは0になる……安全地帯は攻撃表示モンスターにしか対象にできない。守備表示で出すべきだったな）」

「それは俺もだ！罨カードオープン！デモンズチエーン！レッドアイズの効果は無効になり攻撃できない！更に発動！ファントムフォッグブレード幻影霧剣！深淵に潜む者は攻撃できず効果が無効となり、攻撃対象にならない！」

「なら俺はプリティ・ヒロインをリリースしてオーブニング・セレモニーをセットしてターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」この瞬間、コミック・リリーフのコントロールは俺に移る。だが俺は破壊効果は使わない」マジック・プランターを発動！安全地帯を墓地に送り2枚ドロー！」

「……安全地帯が場を離れたことでコミック・リリーフは破壊される」

「墓地の幻影騎士団ダスディローブを除外してデッキから幻影騎士団
ラギッドグローブを加えて召喚！更に強欲で貪欲な壺を発動！デッ
キから10枚除外して2枚ドロ―！ファントムナイト 幻影騎士団サイレントブーツ
を特殊召喚！俺はレベル3のラギッドグローブとサイレントブーツ
でオーバーレイ！再び立ち上がれ！ブレイクソード！」
ファントムナイト
幻影騎士団ブレイクソードATK3000
「ブレイクソードの効果！ORUを一つ使ってブレイクソードと魔界
の宴タ目を破壊！」

ブレイクソードが再び駆けてその大剣を振るうと魔界の宴タ目は
破壊される。

「破壊されたブレイクソードの効果！墓地からラギッドグローブとサ
イレントブーツをレベルを1つ上げて特殊召喚！そしてレベル4と
なったラギッドグローブとサイレントブーツでオーバーレイ！」

混沌の渦から現れるのは凄まじい威圧を放つ反逆の牙

「漆黒の闇より、愚鈍なる力に抗う反逆の牙！今降臨せよ！エクシー
ズ召喚！現れる！ランク4！ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラ
ゴン！」

黒き反逆の竜はフィールドに雄叫びを轟かせる。

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンATK3500

「ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンの効果！ORUを2つ使
い、深淵に潜む者の攻撃力を半分にしてその数値分、このカードの攻
撃力をアップさせる！トリーズン・デイスチャージ！」

ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンATK3500↓45

30

深淵に潜む者 ATK1700↓850

なぜレツドアイズに使わない!?まだ何かあるというのか!?

ユートの方も残りの手札を見るがなにか戸惑っているような気が
する。

「どうした?まだ何かあるんだろ?なら使ってこいよ」

「ッ!?……何故だ?君は……怖くないのか?このデュエルが」

そうか……リアルダメージが発生するこのデュエルに対して迷っ

ているのか……

「……そりゃあ怖いさ」

「なら「でもな。楽しいんだよ。どうしようもないぐらい。怖いよりなにか来るのかってワクワクが勝っちゃうんだよ」……」

ハ……？

「………」「どうしようもないバカだろ？でもいいんだ。だってデュエルは最高なんだから」……」

ユート……？と思った次の瞬間

「フツ……アハハハハハハハ!!確かにバカだ!最高のデュエルバカだ!」

「っておい!そこまで言うか!」

ハア………：「そういやシンゴはこんな奴だったな……バカやって人から笑われるっというぐらいの。」

でも………：「あんなバカだから私もリンもアイツが好きなんだろうな……」

「そうか!なら全力で行かせてもらおう!後悔するなよ!（君は紛れもなくデュエルバカだな。今更かもしれないがそんな君がアカデミアとは思えないよ。だからこのデュエル………：「全力で楽しむ!そして君に勝つ!）俺は速攻魔法、RUM 幻影騎士団ファンタムナイトラウンチを発動!このカードと俺の場のダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴンを素材にランクが1つ上のモンスターをエクシーズ召喚する!」

ランクアップだと!?

「なんだと!」

「マジかよ!」

「そんなのアリか!」

柿本たちが驚いている間に全身が稲妻に包まれた叛逆の竜は変化を遂げていく。プリズムのように結晶化した身体がひび割れていきその姿を現す

「煉獄の底より、未だ鎮まらぬ魂に捧げる叛逆の歌!永久に響かせ現れる!ランクアップ!エクシーズチェンジ!出でよ!ランク5!ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン!」

骨のような装甲をした胸部にダーク・リベリオンよりも枝分かれしている翼を翻して鎮魂の竜は咆哮を轟かせる

ダーク・レクイエム・エクシーズドラゴン ATK3000

「ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンの効果！1ターンに1度！ORUを一つ使い！相手モンスター1体の攻撃力を0にして、そのカードの元々の攻撃力分ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンの攻撃力をアツプさせる！レクイエム・サルベーション！」

広げた翼に宿した水晶から放出されたエネルギーが
レッドアイズ・フレアメタルドラゴン
真紅眼の鋼炎竜を拘束してその力を根こそぎ奪う

ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴン ATK3000↓58

00

レッドアイズ・フレアメタルドラゴン
真紅眼の鋼炎竜 ATK2800↓0

「クツ……！」

「バトルだ！ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンで
レッドアイズ・フレアメタルドラゴン
真紅眼の鋼炎竜を攻撃！」

ダーク・レクイエム・エクシーズ・ドラゴンが夕暮れの空に飛び立ち、その翼を再度広げる。

枝分かれした翼に歪なステンドグラスを形作るように虹色の光が灯されていく。

そして最大まで輝きを宿した翼を翻し、
レッドアイズ・フレアメタルドラゴン
真紅眼の鋼炎竜に向かつて勢いよく突撃する。

「鎮魂のーディザスター・デイスオベイー！」

その牙は動く力を奪われた黒竜を葬るには充分過ぎた

「ぐっ……!!ぐわあああああ!!！」

シンゴ……!!止めたい……!辞めさせたい……!でもダメだ……!
!これは……二人の戦いなのだから……

シンゴは吹き飛ばされながらも体勢を立て直して受け身を取ってダメージを減らす

沢渡シンゴ LP8850↓3050

「対象モンスターが場を離れたことでデモンズチェーンは破壊される。俺は墓地のサイレントブーツを除外してデッキから幻影翼を
ファンタムウイング

手札に加える！更にラギッドグローブを除外してデッキの
幻影死槍を墓地に！2枚伏せてターンエンドだ！」

「俺の……ターン！ブラック・ホール！全てのモンスターを破壊する
！」

「罫カードオープン！ファントムウイング幻影翼！これにより俺のダーク・レクイエム・エクシース・ドラゴンの攻撃力、守備力を500アップさせて、このターン中一度だけ戦闘、効果では破壊されない！これによりブラック・ホールの破壊を無効だ！そして深淵に潜む者が場を離れたことで
ファントムラフオッグブレード幻影霧 剣は破壊される」

ダーク・レクイエム・エクシース・ドラゴン ATK5800 ↓6300

破壊を無効にされたばかりか攻撃力も上げられた……この状況は
厳しいな……

「……俺は召喚僧サモン・プリーストを召喚！効果で守備表示になる
！手札の魔法をコストにデッキからカーテン・ライザーを特殊召喚
「その効果にチェーンしてダーク・レクイエムの効果！ORUを一つ
使い相手モンスターの効果は無効にして破壊する！」クツ……！」

あのドラゴンにはそんな効果もあるのか!?

「そして墓地のダーク・リベリオン・エクシース・ドラゴンを特殊召喚
！」

ダーク・リベリオン・エクシース・ドラゴン DEF2000

その上蘇生まで!?

「カステルを出されると防ぎきれないからね」

確かに……除外するカステルの効果は今までのデュエルで見たと
ころユートのカードでは防げそうにないからか

「まだだ！ブラックホール！全てのモンスターを破壊する！」

2枚も持っていたのか!?!すごいドロウ運だな……

「ツ！なら墓地の幻影死槍を除外して効果発動！闇属性モンスター
が破壊される時、代わりにこのカードを除外することで破壊を無効に
！よってダーク・レクイエムとダーク・リベリオンは破壊されない！」
そんな！二度も凌ぐなんて！

「だったら……ペンデュラム召喚！来い！エクストラデッキからプリティ・ヒロイン！ティンクル・リトルスター！」「させない！神の宣告！ライフ半分をコストに召喚を無効にする！」……………」

ペンデュラム召喚まで無効にされた!?召喚を無効にされたモンスターたちは墓地に送られる。これでは……

ユートLP1000↓500

「……………ありがとう」

「なに……?」

「俺の勝ちだ!」!!」俺は揺れる眼差しを発動!」

なっ!?

「なんだとっ!?!」

「効果でデビル・ヒールとファンキー・コメディアンを破壊してデッキからワイルド・ホープを手札に!そして500のダメージだ!」
「なっ……………」

ユートLP500↓0

振り子から発せられた衝撃波によつてユートは尻餅をつく

シンゴが……勝つたのか……?」

あまりにも静かな決着に皆、言葉も出ない

「……………そうか。君は俺が妨害札を持っていることを読んでいたわけか……………」

まさか……シンゴは何かしらの方法でモンスター効果や除去が無効になることを読んでいたのか!?

「つ……つうても神の宣告じゃなきゃちよつとばかり不味かつたつてもあったから一か八かの賭けだったけどな」

……………やっばりスゴいな

「色々あったが……楽しかったぜ」

シンゴが倒れているユートに手を差し伸べる

「……………ああ、俺もだ」

ユートは笑って差し出された手を掴んで起き上がる

「じゃあ君たちが知っていることを話してくれないか?あつ、隼にはちゃんと説明しておくよ」

「別にいいけど……じゃあ俺の家に行こう」「悪いがそれは私の元でし
てもらいたいな」ツ！」

なっ!?

いつの間にか十数人に囲まれていた私たち

よく見てみると彼らはLDSのバッジをしていた

それにアイツは……

「……赤馬零児か」

「久しぶり……かな？セレナ。そして初めましてMr. 沢渡」

「……天下のLDS社長さんが俺のような一市民になんの御用でしょ
うか？」

シンゴ……警戒を露わにしすぎだ……

「フツ、そう警戒してもらわなくてもいい。私がここに来たのはそこ
の彼らとの接触しなかった……という建前はよそうか。君たちに会
いに来たのだよ。沢渡シンゴ」

なにだ……？なにが目的だ……？

「その様子にユートたちに会いに来たところを見ると大方アカデミア
のことをアンタは知ってそうだな」

「ふむ。君は洞察力が高いようだな。まあ、その通りだ。事情がわ
かっているのならついてきてもらいたいのだが……」

……どうあっても逃がしたくないようだな

「……ふう。わーったよ！俺たちとしてもアンタと協力関係を結んだ
方が得があるしな！ついてってやるよ」

「感謝する。Mr. 沢渡」

「あ、あと一人呼びたい奴がいるんだがいいか？」

「わかった。その人物の元に迎えを寄越そう」

これが私たちと赤馬零児の関係の始まりだった